「第3の警告(3) -励ましの言葉-」 ヘブル6:9~20

1. はじめに

- (1) この手紙が書かれた理由を再確認する。
 - ①信仰が後退しつつあった第2世代のメシアニック・ジューたちへの励まし
 - ②彼らは、迫害と誤った教理に直面し、元の信仰に回帰しようとしていた。
 - ③手紙の内容は牧会的であり、実践的である。
- (2) ユダヤ教の3つの柱は、天使、モーセ、レビ的祭司である。
 - ①御子は、天使に勝るお方であることが証明された。
 - ②御子は、モーセに勝るお方であることも証明された。
 - ③御子は、アロンに勝るお方であることの証明が始まった。
- (3) しかし著者は、この証明を途中でストップし、第3の警告を語り始める。
 - ①著者が今取り上げているテーマは、「メルキゼデクの位に等しい大祭司」である。
 - ②著者は、読者にはこのテーマを理解する力がないと判断した。
 - ③そこで彼は、その先に進むことを中断して、警告の言葉を語ることにした。
 - ④第3の警告(1)の内容は、「信仰の停滞」であった。
 - ⑤第3の警告(2)の内容は、「信仰の停滞への処方箋」である。
 - ⑥第3の警告(3)の内容は、「励ましの言葉」である。
- (4) 厳しい警告に続く励ましの言葉が、この著者のパターンである。
 - ①第2の警告にも、このパターンが見られる。
 - ②3:7~4:13 が厳しい警告。
 - ③4:14~16 が優しい励ましの言葉。

2. アウトライン

- (1) 信者の救いに関する確信 (9~12節)
- (2) 神の約束に関する確信(13~20節)

結論: 信仰の後退への対処法

- (1) 神は、私が行なった愛の行為を覚えておられる。
- (2) 不変の2つの事柄は、大いなる励ましである。
- (3) 約束の希望は、安定した錨である。

第3の警告(3)について学ぶ。

- I. 信者の救いに関する確信 (9~12 節)
 - 1. 9 節

Heb 6:9 だが、愛する人たち。私たちはこのように言いますが、あなたがたについては、もっと良いことを確信しています。それは救いにつながることです。

- (1)「愛する人たち」
 - ①読者は、すでに救われている信者たちである。
 - ②彼らは、霊的な幼子の状態に留まっていた。
 - ③著者は、彼らの成長を願って、相当厳しい警告を書いてきた。
 - ④ここで、彼らに関して絶望しているわけではないことを示す必要性を感じた。
- (2)「あなたがたについては、もっと良いことを確信しています。それは救いにつながることです」
 - ①「しかし、愛する者たちよ。こうは言うものの、わたしたちは、救にかかわる 更に良いことがあるのを、あなたがたについて確信している」(口語訳)
 - ②これまでの警告(信仰の後退)は、まだ現実のものとなっていない。
 - ③「もっと良いこと」とは、救いにかかわることである。
 - ④つまり、霊的成熟を目指して前進し、神が救われた者のために用意されたすべての祝福に与ること。
- 2. 10 節

Heb 6:10 神は正しい方であって、あなたがたの行いを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。

- (1)「神は正しい方であって」
 - ①「神は不義なかたではないから、」(口語訳) *原文では、二重否定である。
 - ②著者は、神は義なる方であることを知っている。
- (2)「お忘れにならないのです」
 - ①あなたがたの行い
 - ②過去に聖徒たちに仕えたこと
 - *恐らく、経済的援助であろう。
 - *エルサレム教会の聖徒たちは貧しかった。

- ③今も聖徒たちに仕えていること
 - *信仰の後退の危険はあるが、今も信仰は働いている。
- ④神の御名のために示した愛
 - *この場合の行いの動機は、神の栄光が現れることである。
- 3. 11~12節

Heb 6:11 そこで、私たちは、あなたがたひとりひとりが、同じ熱心さを示して、最後まで、 私たちの希望について十分な確信を持ち続けてくれるように切望します。

Heb 6:12 それは、あなたがたがなまけずに、信仰と忍耐によって約束のものを相続するあの人たちに、ならう者となるためです。

- (1) 著者の願い①
 - ①彼らが、信者に与えられている希望について確信を持ち続けること。
 - ②忍耐は希望を生み出す。
- (2) 著者の願い②
 - ①彼らが、なまけないこと。
 - ②ギリシア語で「ノスロイ」である。
 - ③「耳が鈍い」という意味である。

Heb 5:11 この方について、私たちは話すべきことをたくさん持っていますが、あなたがたの 耳が鈍くなっているため、説き明かすことが困難です。

- (3) 著者の願い(3)
 - ①彼らが、信仰の先輩を見習うこと。
 - ②信仰の先輩とは、「信仰と忍耐によって約束のものを相続する人たち」である。
 - ③その実例は、11:1~40に出てくる。

Ⅱ. 神の約束に関する確信(13~20節)

1. 13~15 節

Heb 6:13 神は、アブラハムに約束されるとき、ご自分よりすぐれたものをさして誓うことがありえないため、ご自分をさして誓い、

Heb 6:14 こう言われました。「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたを大いにふやす。」

Heb 6:15 こうして、アブラハムは、忍耐の末に、約束のものを得ました。

- (1) 信仰の先輩の実例は、アブラハムである。
 - ①彼は、忍耐の末に、約束のものを得た。

(2) 神は、誓われた。

①創22:16~18

Gen 22:16 仰せられた。「これは【主】の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、

Gen 22:17 わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。

Gen 22:18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたが わたしの声に聞き従ったからである。」

- ②神よりもすぐれたものは、存在しない。
- ③それゆえ、ご自身を指して誓われた。
- ④「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたを大いにふやす」
- (3) アブラハムが得たもの
 - ①イサクの誕生
 - ②イスラエル民族の誕生
 - ③メシアの誕生
 - ④メシアを信じる異邦人信者の誕生

2. 16~17 節

Heb 6:16 確かに、人間は自分よりすぐれた者をさして誓います。そして、確証のための誓い というものは、人間のすべての反論をやめさせます。

Heb 6:17 そこで、神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらにはっきり示そうと思い、誓いをもって保証されたのです。

- (1) 人間の場合は、神を指して誓うことが最も強い誓いである。
 - ①その誓いに反論する余地はない。
- (2) 神の場合は、ご自身を指して誓われた。
 - ①神は、約束の相続者たちに、神の計画が変わらないことを保証された。
 - ②アブラハムだけでなく、アブラハムの信仰に倣う者たちへの保証でもある。

3. 18 節

Heb 6:18 それは、変えることのできない二つの事がらによって、――神は、これらの事がらのゆえに、偽ることができません――前に置かれている望みを捕らえるためにのがれて来た私たちが、力強い励ましを受けるためです。

(1) (新共同訳)

Heb 6:18 それは、目指す希望を持ち続けようとして世を逃れて来たわたしたちが、二つの不変の事柄によって力強く励まされるためです。この事柄に関して、神が偽ることはありえません。

- (2) 信者は、罪に満ちた世界から逃れ、天の都に向かっている。 ①信者は、2つの不変の事柄によって励ましを得ている。
- (3) 2つの不変の事柄
 - ①神の言葉
 - *神は、嘘をつくことができない。
 - *神の約束は、必ず成就する。
 - ②神の誓い
 - *ご自身を指して、約束の成就を誓われた。

4. 19~20 節

Heb 6:19 この望みは、私たちのたましいのために、安全で確かな錨の役を果たし、またこの望みは幕の内側に入るのです。

Heb 6:20 イエスは私たちの先駆けとしてそこに入り、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司となられました。

(1) (新共同訳)

Heb 6:19 わたしたちが持っているこの希望は、魂にとって頼りになる、安定した錨のようなものであり、また、至聖所の垂れ幕の内側に入って行くものなのです。

- ①安全な港を求めている船にとって、希望は安定した錨の役割を果たす。
- ②錨は、安全な場所に降ろされる。
- ③その安全な場所とは、至聖所(神の臨在の場、天の至聖所)である。
- (2) イエスは、先駆者としてそこに入った。
 - ①船員が小舟に乗り換えて先を進み、安全な場所に錨を降ろすというイメージ。
 - ②イエスは、至聖所の中に錨を降ろされた。
 - ③救いの望みを持ち続ける者は、安定した錨につながっているので、漂流することがない。
 - ④イエスは、至聖所の中で奉仕をされるメルキゼデクのような大祭司である。
 - ⑤年に一度ではなく、常にそこで奉仕をしておられる。

結論:信仰の後退への対処法

- 1. 神は、私が行なった愛の行為を覚えておられる。
 - (1) 現実の世界では、評価されないことや、人目に付かないことがある。
 - (2) しかし、神はご存じである。
 - (3) 偽善を行なうよりも、愛の動機で行い、神に知られていることの方がよい。
- 2. 不変の2つの事柄は、大いなる励ましである。
 - (1) 神は約束されたことを実行される。
 - ①神は、偽りを言うことができない。
 - ②神は、契約の神である。
 - (2) 神はご自身を指して誓われた。
- 3. 約束の希望は、安定した錨である。
 - (1) ヨセフの夢の例
 - (2) 聖書研究を通して、神の約束を知る必要がある。
 - (3) 終末的希望は、信仰生活の錨である。

「メルキゼデクとイエスの対比」 ヘブル7:1~3

1. はじめに

- (1) この手紙が書かれた理由を再確認する。
 - ①信仰が後退しつつあった第2世代のメシアニック・ジューたちへの励まし
- (2) ユダヤ教の3つの柱は、天使、モーセ、レビ的祭司である。
 - ①御子は、天使に勝るお方であることが証明された。
 - ②御子は、モーセに勝るお方であることも証明された。
 - ③御子は、アロンに勝るお方であることの証明が続いている。*メルキゼデクのテーマが一時中断していた。*ここから、そのテーマが再開される。
- (3) ヘブ7:1~28の構造
 - ①メルキゼデクとイエスの対比(7:1~3)
 - ②メルキゼデク的祭司職とレビ的祭司職の対比 (7:4~10)
 - ③レビ的祭司職とイエスの祭司職の対比(7:11~25)
 - ④結論 (7:26~28)
- (4) メルキゼデクに関する予備知識
 - ①メルキゼデクという名は、2箇所にしか出てこない。

*創14:17~20 (歴史的記録)

Gen 14:17 こうして、アブラムがケドルラオメルと、彼といっしょにいた王たちとを打ち破って帰って後、ソドムの王は、王の谷と言われるシャベの谷まで、彼を迎えに出て来た。

Gen 14:18 さて、シャレムの王メルキゼデクはパンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。

Gen 14:19 彼はアブラムを祝福して言った。/「祝福を受けよ。アブラム。/天と地を造られた方、いと高き神より。

Gen 14:20 あなたの手に、あなたの敵を渡された/いと高き神に、誉れあれ。」/アブラムは すべての物の十分の一を彼に与えた。

*詩110:4(預言)

Psa 110:4 【主】は誓い、そしてみこころを変えない。/「あなたは、メルキゼデクの例にならい、/とこしえに祭司である。」

②メルキゼデクに関する情報は極めて少ない。

- ③そのことが、彼とイエスを対比させる土台となっている。
- 2. アウトライン:メルキゼデクとイエスの対比
 - (1) 類似性(1) (1節 a)
 - (2) 類似性② (1節b)
 - (3) 類似性③ (2節)
 - (4) 類似性④ (3節 a)
 - (5) 類似性⑤ (3節b)

結論:

- (1) ディスペンセーションの移行
- (2) 型と本体の関係

メルキゼデクとイエスの対比について学ぶ。

I. 類似性① (1節 a)

Heb 7:1a このメルキゼデクは、サレムの王で、すぐれて高い神の祭司でしたが、

- 1. メルキゼデクは、王であり祭司であった。
 - (1) メルキゼデクの後半の「ツェデク」は、エブス人の王朝の王の名である。

①ヨシ10:1

Jos 10:1 さて、エルサレムの王アドニ・ツェデクは、ヨシュアがアイを攻め取って、それを 聖絶し、先にエリコとその王にしたようにアイとその王にもしたこと、またギブオンの住民が イスラエルと和を講じて、彼らの中にいることを聞き、

- (2) サレムとはエルサレムのことである。
 - ①この頃は、エブス人の町であった。
- (3) 彼は、すぐれて高い神の祭司であった。
 - ①真の神に仕える祭司であった。
- (4) 彼の統治の特徴
 - ①義なる統治(義なる王)
 - ②平和な統治(サレム)
- 2. イエスもまた王であり祭司である。

(1) イエスによる統治 (イザ9:6~7)

Isa 9:6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。/ひとりの男の子が、私たちに与えられる。/主権はその肩にあり、/その名は「不思議な助言者、力ある神、/永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

Isa 9:7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、/ダビデの王座に着いて、その王国を 治め、/さばきと正義によってこれを堅く立て、/これをささえる。今より、とこしえまで。 /万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。

- (2) イエスが統治する王国の特徴
 - ①正義
 - ②平和

Ⅱ. 類似性② (1節b)

Heb 7:1b アブラハムが王たちを打ち破って帰るのを出迎えて祝福しました。

- 1. メルキゼデクは、アブラハムを祝福した。
 - (1) 祭司としての役割を果たした。
- 2. イエスもまた、祭司として信者を祝福される。
 - (1) 詳細は、7章後半で解説される。

Ⅲ. 類似性③ (2節)

Heb 7:2 またアブラハムは彼に、すべての戦利品の十分の一を分けました。まず彼は、その名を訳すと義の王であり、次に、サレムの王、すなわち平和の王です。

- 1. アブラハムは、メルキゼデクを自分よりも上位にいる人物だと認めた。
 - (1) アブラハムは、戦利品の十分の一をメルキゼデクに分け与えた。
 - ①これは、十一献金のことではない。
 - ②十一献金の規定は、モーセの律法の一部である。
 - ③メルキゼデクは、それを受け取った。
 - ④彼もまた、自分がアブラハムよりも上位にいることを認めた。
 - (2) ここで、メルキゼデクという名の意味が解説される。
 - ①義の王
 - ②平和の王

- 2. イエスは、メルキゼデクの位に等しい祭司である。
 - (1) つまり、イエスは、どんな祭司よりも優れているということある。

IV. 類似性④ (3節 a)

Heb 7:3a 父もなく、母もなく、系図もなく、

- 1. メルキゼデクは、単独の(独立した)祭司である。
 - (1) 彼は、「すぐれて高い神の祭司」として登場し、すぐに姿を消す。
 - ①彼の両親が誰であるか、分からない。
 - ②彼の系図は、啓示されていない。
 - ③これは、両親がいないとか、系図がないとかいう意味ではない。
 - ④メルキゼデクの祭司職の場合は、系図は問題ではない。
 - (2) レビ的祭司職の場合は、系図が重要である。
 - ①アロンの子孫でなければ、祭司になれない。
 - ②バビロン捕囚から帰還したときに、アロンの子孫であることを証明できない人 たちがいたが、彼らは祭司になれなかった。
 - ③エズ2:61~62

Ezr 2:61 祭司の子孫のうちでは、ホバヤ族、コツ族、バルジライ族。――このバルジライは、ギルアデ人バルジライの娘のひとりを妻にめとったので、その名をもって呼ばれていた―― Ezr 2:62 これらの人々は、自分たちの系図書きを捜してみたが、見つからなかったので、彼らは祭司職を果たす資格がない者とされた。

- 2. イエスもまた、単独の(独立した)祭司である。
 - (1) イエスは、レビ族の子孫でも、アロンの子孫でもない。
 - ①イエスは、ユダ族の子孫である。
 - (2) イエスの祭司職は、系図に基づくものではない。

V. 類似性⑤ (3 節 b)

Heb 7:3b その生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされ、いつまでも祭司としてとどまっているのです。

1. メルキゼデクの祭司職は、時間を超越している。

- (1) 祭司職の始まりも終わりもない。
 - ①その祭司職が別の祭司に引き継がれたという記録もない。
 - ②聖書の記録に基づけば、メルキゼデクの祭司職は時間の制約を受けていない。
 - ③つまり、メルキゼデクの祭司職は継続するということである。
- (2) レビ的祭司職の場合は、任期が決まっている。

①民 $4:2\sim3$

Num 4:2 「レビ人のうち、ケハテ族の人口調査を、その氏族ごとに、父祖の家ごとにせよ。

Num 4:3 それは会見の天幕で務めにつき、仕事をすることのできる三十歳以上五十歳までのすべての者である。

②民 $8:24\sim25$

Num 8:24 「これはレビ人に関することである。二十五歳以上の者は会見の天幕の奉仕の務めを果たさなければならない。

Num 8:25 しかし、五十歳からは奉仕の務めから退き、もう奉仕してはならない。

③25歳からか30歳からかは、時代の必要によって決める。

- (3) 訳文の比較
 - ①「神の子に似た者とされ」(新改訳)
 - ②「神の子に似た者であって、」(新共同訳)
 - ③「神の子のようであって、」(口語訳)
 - ④メルキゼデクは、受肉前のメシアではない。
 - ⑤両親がおり、誕生の日も、死んだ日もあるが、啓示されていないだけである。
 - ⑥メシアの顕現の場合は、一時的であるが、彼は長期間王として統治していた。
 - ⑦祭司は、人間でなければならない。この時点では、メシアは受肉していない。
- (5) メルキゼデクの祭司職は、すべての人に仕えるためのものである。
 - ①レビ族祭司職は、契約の民イスラエルに対する奉仕である。
- 2. イエスの祭司職も、時間を超越している。
 - (1) イエスの祭司職は、普遍的なものである。

結論:

- 1. ディスペンセーションの移行
 - (1) ディスペンセーションは、ギリシア語で「オイコノミア」である。

- (2) ディスペンセーションとは、「神の計画が進展していく過程において出現する、 明確に区分可能な神の経綸のことである」
 - ①神が人間を統治する枠組みは、時代とともに進展する。
 - ②各ディスペンセーションにおいて、神に対する人間の責務は変わる。
 - (3) 著者は、ディスペンセーションが移行したことを伝えようとしている。
 - ①「律法の時代」の土台は、大祭司である。
 - *「律法の時代」が終わると、レビ的祭司職も終わる。
 - *その逆も真理である。
 - ②「恵みの時代」の土台は、メルキゼデク的祭司職である。 *ディスペンセーションが移行すると、祭司職も移行する。
 - ③それゆえ、レビ的祭司職に回帰することは、古いディスペンセーションに回帰することであり、それは不可能なことである。
- 2. 型と本体の関係
 - (1) 型を見ていると、本体が見えてくる。
 - ①過越の小羊
 - ②マナ
 - ③打たれた岩
 - ④荒野で上げられた青銅の蛇
 - (2) メルキゼデクは、メシアの型である。
 - ①この手紙の著者は、メルキゼデクを型として用いて、メシアを説明している。 ②詩 110:4

Psa 110:4 【主】は誓い、そしてみこころを変えない。/「あなたは、メルキゼデクの例にならい、/とこしえに祭司である。」(新改訳)

Psa 110:4 ヱホバ誓(ちかひ)をたてて聖意(みこころ)をかへさせたまふことなし 汝(なんぢ)はメルキセデクの状(さま)にひとしくとこしへに祭司(さいし)たり (文語訳)

- (3) メルキゼデクに関して言えることは、メシアに関しても言える。
 - ①イエスは、王であり祭司である。
 - ②イエスは、祭司として信者を祝福される。
 - ③イエスは、どんな祭司よりも優れている。
 - ④イエスは、単独の(独立した)祭司である。
 - ⑤イエスの祭司職は、時間を超越しており、普遍的なものである。
- (4) 2 コリ 5:17

2Co 5:17 だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは 過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

「メルキゼデク的祭司職とレビ的祭司職の対比」 ヘブル7:4~10

1. はじめに

- (1) この手紙が書かれた理由を再確認する。
 - ①信仰が後退しつつあった第2世代のメシアニック・ジューたちへの励まし
- (2) ユダヤ教の3つの柱は、天使、モーセ、レビ的祭司である。
 - ①御子は、天使に勝るお方であることが証明された。
 - ②御子は、モーセに勝るお方であることも証明された。
 - ③御子は、アロンに勝るお方であることの証明が続いている。
- (3) ヘブ7:1~28の構造
 - ①メルキゼデクとイエスの対比(7:1~3)
 - ②メルキゼデク的祭司職とレビ的祭司職の対比 (7:4~10)
 - ③レビ的祭司職とイエスの祭司職の対比(7:11~25)
 - ④結論 (7:26~28)
- (4) ユダヤ人たちは、自分たちがアブラハムの子孫であることを誇りとしていた。 ①マタ3:9

Mat_3:9 『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で言うような考えではいけない。あなたがたに言っておくが、神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです。

②ヨハ8:33

Joh_8:33 彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、決してだれの奴隷になったこともありません。あなたはどうして、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。」

(5) メルキゼデクに関する認識は、低かった(2箇所にしか出てこない)。

*創14:17~20 (歴史的記録)

Gen 14:17 こうして、アブラムがケドルラオメルと、彼といっしょにいた王たちとを打ち破って帰って後、ソドムの王は、王の谷と言われるシャベの谷まで、彼を迎えに出て来た。

Gen 14:18 さて、シャレムの王メルキゼデクはパンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き 神の祭司であった。

Gen 14:19 彼はアブラムを祝福して言った。/「祝福を受けよ。アブラム。/天と地を造られ

た方、いと高き神より。

Gen 14:20 あなたの手に、あなたの敵を渡された/いと高き神に、誉れあれ。」/アブラムは すべての物の十分の一を彼に与えた。

*詩110:4 (預言)

Psa 110:4 【主】は誓い、そしてみこころを変えない。/「あなたは、メルキゼデクの例にならい、/とこしえに祭司である。」

- 2. アウトライン:メルキゼデク的祭司職とレビ的祭司職の対比
 - (1) メルキゼデク的祭司職の優位性(1) (4~5節)
 - (2) メルキゼデク的祭司職の優位性② (6~7節)
 - (3) メルキゼデク的祭司職の優位性③ (8節)
 - (4) メルキゼデク的祭司職の優位性(4) (9~10節)

結論:

- (1) 十一献金
- (2) ユダヤ人の盲点
- (3) すぐれて高い神の祭司

メルキゼデク的祭司職の優位性について学ぶ。

- I. メルキゼデク的祭司職の優位性① (4~5 節)
 - 1. 4節a

Heb 7:4a その人がどんなに偉大であるかを、よく考えてごらんなさい。

- (1) メルキゼデク的祭司職とレビ的祭司職の対比の目的
 - ①この対比は、大祭司イエスと大祭司アロンの対比である。
 - ②大祭司イエスが大祭司アロンよりも優れていることが証明される。
- (2)「よく考えてごらんなさい」
 - ①ギリシア語で「theoreo」である。英語で「consider」「think」「see」など。
 - ②識別力を働かせて、しっかりと観察しなさいという意味である。
 - ③「ある歴史的出来事について学び、神学的結論を導き出せ」ということ。
 - ④創14:18~20は、メルキゼデクの偉大さを証明している。
- 2. 4節b

Heb 7:4b 族長であるアブラハムでさえ、彼に一番良い戦利品の十分の一を与えたのです。

- (1) アブラハムは、最も偉大な人物である。
 - ①「族長であるアブラハム」
 - ②英語の「Patriarch」。ギリシア語の「patriarchēs」
 - ③「patria」は部族のこと。「archō」は統治するということ。
 - ④アブラハムは、誰よりも優位な立場に置かれていた。
 - ⑤ユダヤ人たちは、先祖にアブラハムがいることを誇りとしていた。
- (2) そのアブラハムが、メルキゼデクに十分の一を与えた。
 - ①アブラハムは、メルキゼデクが自分よりも優位な立場にあることを認めた。 *行いの優位性や道徳的優位性ではなく、立場上の優位性である。
 - ②「一番良い戦利品の十分の一」ということが強調されている。
 - ③メルキゼデクは、アブラハムから十分の一を受け取った。 *メルキゼデクも、自らの優位性を認めた。

3. 5節

Heb 7:5 レビの子らの中で祭司職を受ける者たちは、自分もアブラハムの子孫でありながら、 民から、すなわち彼らの兄弟たちから、十分の一を徴集するようにと、律法の中で命じられて います。

- (1) レビ的祭司職と十分の一の関係
 - ①レビ的祭司たちは、アブラハムの子孫である。
 - ②彼らは、他の兄弟たち(他の部族)から十分の一を徴収する。
 - ③それが、モーセの律法の規定の中に含まれている。
- (2) しかし、メルキゼデクは、族長アブラハムから十分の一を受け取った。
 - ①つまり、メルキゼデクは、レビ的祭司(アロン)よりも優位な立場にある。
 - ②これは、誰が誰から十分の一を受け取ったかという議論である。

Ⅱ.メルキゼデク的祭司職の優位性②(6~7節)

1. 6節

Heb 7:6 ところが、レビ族の系図にない者が、アブラハムから十分の一を取って、約束を受けた人を祝福したのです。

- (1) メルキゼデクは、アブラハムを祝福した。
 - ①メルキゼデクは、レビ族の系図にない人である。*つまり、レビ族とは血のつながりがない。

*つまり、十分の一を受け取る法的資格がないのである。

- ②その彼が、アブラハムから十分の一を受け取った。 *メルキゼデクには、十分の一を受け取る資格が最初から備わっていた。
- ③そして、アブラハムを祝福した。
 - *アブラハムは、「契約に基づく約束」を受けていた。
 - *アブラハムの子孫からメシアが誕生する。
 - *そのアブラハムを祝福できる人など、人間の中には存在しない。

2. 7節

Heb 7:7 いうまでもなく、下位の者が上位の者から祝福されるのです。

- (1) 下位の者が上位の者から祝福される。
 - ①これは、当然のことである。
 - *「いうまでもなく」(新改訳)
 - *「当然なことです」(新共同訳)
 - *「論なき事なり」(文語訳)
- (2) アブラハムがメルキゼデクを祝福したのではない。
 - ①メルキゼデクがアブラハムを祝福したのである。
 - ②このことから、メルキゼデクはアブラハムよりも上位にあることが分かる。
 - ③つまり、メルキゼデクはレビ的祭司職よりも優位にあることが分かる。

Ⅲ. メルキゼデク的祭司職の優位性③ (8節)

1. 8節

Heb 7:8 一方では、死ぬべき人間が十分の一を受けていますが、他の場合は、彼は生きているとあかしされている者が受けるのです。

- (1) レビ的祭司職では、死ぬべき人間が十分の一を受けている。
 - ①祭司は、必ず死ぬ。
 - ②それゆえ、モーセの律法には、祭司職の継承に関する規定がある。
- (2) メルキゼデクの場合は、生きているとあかしされている。
 - ①創世記の記事では、メルキゼデクの死に関する言及がない。
 - ②さらに、その祭司職が継承されたという記録もない。
 - ③それが、「生きているとあかしされている」という意味である。

- (3) メルキゼデク的祭司職は、永遠の祭司職である。
 - ①それゆえ、レビ的祭司職よりも優位にある。

IV. メルキゼデク的祭司職の優位性④ (9~10 節)

1. 9節

Heb 7:9 また、いうならば、十分の一を受け取るレビでさえアブラハムを通して十分の一を納めているのです。

- (1) レビは、アブラハムを通して十分の一をメルキゼデクに納めた。
 - ①レビは、レビ的祭司職の源流に当たる人物である。
 - ②祭司はすべて、レビから出ている。
 - ③実際には、レビはメルキゼデクに十分の一を納めたわけではない。
 - ④しかし、「言ってみれば」、そう考えることは可能である。

2. 10節

Heb 7:10 というのは、メルキゼデクがアブラハムを出迎えたときには、レビはまだ父の腰の中にいたからです。

- (1) 「というのは」
 - ①なぜ、レビがメルキゼデクに十分の一を納めたと言えるのか。
 - ②その理由が、10節で解説されている。
 - ③これは、「神学的類論」である。
- (2) アブラハムとその子孫は、共同体として1人の個人と見なされる。
 - ①レビはまだアブラハムの腰の中にいた。
 - ②レビは、アブラハムが十分の一を捧げた行為に参加していた。
 - ③メルキゼデクがアブラハムを祝福したとき、レビも祝福を受けた。
 - ④それゆえ、メルキゼデクはレビ的祭司職よりも優位にある。
- (3) 後のユダヤ教のラビたちの議論
 - ①神は、メルキゼデクから祭司職を取り上げ、それをアブラハムに与えた。
 - ②詩 110:4 にそれが記されている。

Psa 110:4 【主】は誓い、そしてみこころを変えない。/「あなたは、メルキゼデクの例にならい、/とこしえに祭司である。」

③しかし、詩110:4は、王である祭司であるメシアに関する預言である。

- (4) メルキゼデクは御子イエスの型である。
 - ①それゆえ、御子イエスの祭司職は、レビ的祭司職に勝る。

結論:

1. 十一献金

- (1) 十一献金の規定は、モーセの律法に含まれる。
 - ①メシアの死によってモーセの律法は無効になった。
 - ②それゆえ、今日十一献金を命じることには聖書的根拠がない。
- (2) しかし、創14:18~20を根拠に、十一献金の有効性を主張する人もいる。
 - ①アブラハムが十分の一を捧げたのは、モーセの律法が与えられる前である。
 - ②それゆえ、モーセの律法が無効になっても、十一献金の規定は有効である。
- (3) この見解は、間違っている。
 - ①アブラハムが十分の一を分けたのは、当時の中近東にすでにそのような習慣が あったからである。十分の一を分けることは、普遍的命令ではない。
 - ②アブラハムは、戦利品の中から一番よいものを分け与えた。 *収入の中から捧げたわけではない。
 - ③アブラハムが捧げたのは、一度限りの行為であった。
- (4) 新約時代の献金に関する律法(2コリ9:7)

2Co_9:7 ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。

- ①いやいやながらではなく
- ②強いられてでもなく
- ③心で決めたとおりに
- ④喜んで与える。

2. ユダヤ人の盲点

- (1) 彼らには、ヘブル語聖書 (旧約聖書) に隠されたメシアが見えていない。
 - ①神は、無数のメシアの型を用意し、啓示された。
 - ②メシアが到来したときに、そのお方を認識できるようにされた。
 - ③しかし、未だに彼らの目には覆いが掛けられている。
- (2) 彼らは、アブラハムとメルキゼデクの関係についても盲目であった。
 - ①アブラハムは、ユダヤ人でない祭司を自分よりも優位にある者と認めた。
 - ②このことは、ヘブル語聖書に啓示されている。
 - ③しかし、ユダヤ人たちは今日に至るまで、このことについて盲目である。

3. すぐれて高い神の祭司

- (1) メルキゼデクは、「すぐれて高い神の祭司」である。
 - ①メルキゼデクは、御子イエスの型である。
 - ②御子イエスこそ、究極的な「すぐれて高い神の祭司」である。
 - ③御子イエスの大祭司としての働きの特徴
 - *時間的制限のない永遠の大祭司である。
 - *民族的枠を超越した普遍的大祭司である。
- (2) ヨハ14:6

Joh 14:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

- ①御子イエスだけ、唯一の大祭司である。
- ②ユダヤ人も異邦人も、御子イエスを通して父なる神のみもとに行く。

「レビ的祭司職とイエスの祭司職の対比」 ヘブル7:11~28

1. はじめに

- (1) この手紙が書かれた理由を再確認する。
 - ①信仰が後退しつつあった第2世代のメシアニック・ジューたちへの励まし
- (2) ユダヤ教の3つの柱は、天使、モーセ、レビ的祭司である。
 - ①御子は、天使に勝るお方であることが証明された。
 - ②御子は、モーセに勝るお方であることも証明された。
 - ③御子は、アロンに勝るお方であることの証明が続いている。
- (3) ヘブ7:1~28の構造
 - ①メルキゼデクとイエスの対比 (7:1~3)
 - ②メルキゼデク的祭司職とレビ的祭司職の対比 (7:4~10)
 - ③レビ的祭司職とイエスの祭司職の対比 (7:11~25)
 - ④結論 (7:26~28)
- (4) メルキゼデクに関する聖書箇所(2箇所のみ)

*創14:17~20 (歴史的記録)

・アブラハムがメルキゼデクに戦利品の十分の一を与えた。

*詩110:4(預言)

Psa 110:4 【主】は誓い、そしてみこころを変えない。/「あなたは、メルキゼデクの例にならい、/とこしえに祭司である。」

- 2. アウトライン:レビ的祭司職とイエスの祭司職の対比
 - (1) 新しい祭司職が古い祭司職に取って代わった(11~19節)
 - (2) 新しい祭司職は古い祭司職よりも優れている (20~25節)
 - (3) 結論 (26~28節)

結論:ヘブル書とロマ書の対比

- (1) ヘブ7:12~13とロマ6:14
- (2) ヘブ7:24~25 とロマ8:34

レビ的祭司職とイエスの祭司職の対比について学ぶ。

- I. 新しい祭司職が古い祭司職に取って代わった(11~19節)
 - 1. 11~12節

Heb 7:11 さて、もしレビ系の祭司職によって完全に到達できたのだったら、――民はそれを 基礎として律法を与えられたのです――それ以上何の必要があって、アロンの位でなく、メル キゼデクの位に等しいと呼ばれる他の祭司が立てられたのでしょうか。

Heb 7:12 祭司職が変われば、律法も必ず変わらなければなりませんが、

- (1) レビ的祭司職と律法の関係
 - ①レビ的祭司職は、律法の基礎である。
 - ②つまり、レビ的祭司職がなければ律法が機能しないということである。
 - ③レビ的祭司職と律法とは相関関係にある。
 - ④片方が機能しなくなれば、もう片方も機能しなくなる。
- (2) レビ的祭司職は、不完全なものである。
 - ①レビ的祭司職は、「神との完全に調和ある関係」をもたらすことができない。
 - ②レビ的祭司職には欠陥があるので、より良い祭司職が必要なのである。
 - ③「他の祭司」とは、「質の違う他の祭司」という意味である。
- (3) 祭司職の移行
 - ①不完全な祭司職=レビ的祭司職=アロンの位の祭司職
 - ②完全な祭司職=メルキゼデク的祭司職=イエスの祭司職
- (4) 律法の移行
 - ①祭司職と律法は不可分な関係にある。
 - ②祭司職が変わると、律法も変わる。
 - ③律法が変わると、祭司職も変わる。
- 2. 13~14節

Heb 7:13 私たちが今まで論じて来たその方は、祭壇に仕える者を出したことのない別の部族 に属しておられるのです。

Heb 7:14 私たちの主が、ユダ族から出られたことは明らかですが、モーセは、この部族については、祭司に関することを何も述べていません。

- (1) 古い祭司職から新しい祭司職に移行したという証拠
 - ①古い祭司職(レビ的祭司職)は、レビ族から出る。
 - ②しかし、新しい祭司職 (メルキゼデク的祭司職) は、そうではない。

- ③主イエスは、ユダ族から出られた。
- ④モーセは、ユダ族から出る祭司職については何も語っていない。
- ⑤つまり、モーセが命じていなかった祭司職が機能し始めたのである。

3. 15~16 節

Heb 7:15 もしメルキゼデクに等しい、別の祭司が立てられるのなら、以上のことは、いよいよ明らかになります。

Heb 7:16 その祭司は、肉についての戒めである律法にはよらないで、朽ちることのない、いのちの力によって祭司となったのです。

- (1) 以上のこと(祭司職が移行したこと)を証明するさらなる証拠がある。
 - ①メルキゼデクのような別の祭司が立てられた。
- (2) その祭司の特徴
 - ①律法が命じる家系 (レビ族) に基づいて立てられたのではない。
 - ②「朽ちることのない、いのちの力によって祭司となった」 *イエスは、永遠に生きておられる。 *イエスは、永遠の祭司である。

4. 17節

Heb 7:17 この方については、こうあかしされています。/「あなたは、とこしえに、/メルキゼデクの位に等しい祭司である。」

- (1) ここで再度、詩 110:4 が引用されている。
 - ①モーセの律法に基づく祭司職が機能している時代に、ダビデは預言した。
 - ②あるお方が、レビ的祭司職ではない祭司として現れる。
 - ③そのお方は、「**とこしえ**」にメルキゼデクのような祭司である。
- (2) 死海文書は、「油注がれた2人の人物」に言及している。
 - ①ダビデ(ユダ族)から出てくる王なるメシア
 - ②レビ族から出てくる大祭司
 - ③詩110:4は、メルキゼデク的祭司は、レビ族から出るのではないと教える。
 - ④つまり、「油注がれた2人の人物」は、同一人物だということである。

5. 18~19節

Heb 7:18 一方で、前の戒めは、弱く無益なために、廃止されましたが、

Heb 7:19 ——律法は何事も全うしなかったのです——他方で、さらにすぐれた希望が導き入

れられました。私たちはこれによって神に近づくのです。

- (1) モーセの律法は、弱く無益であった。 ①それゆえ、廃止された。
- (2) それに代わって、さらにすぐれた希望がもたらされた。
 - ①すぐれた希望とは、大祭司イエスのことである。
 - ②私たちは、大祭司イエスを通して神に近づくのである。
 - ③ではなぜ、大祭司イエスがすぐれた希望と言えるのか。

Ⅱ. 新しい祭司職は古い祭司職よりも優れている(20~25節)

1. 20~22 節

Heb 7:20 また、そのためには、はっきりと誓いがなされています。

Heb 7:21 ――彼らの場合は、誓いなしに祭司となるのですが、主の場合には、主に対して次のように言われた方の誓いがあります。/「主は誓ってこう言われ、/みこころを変えられることはない。/『あなたはとこしえに祭司である。』」――

Heb 7:22 そのようにして、イエスは、さらにすぐれた契約の保証となられたのです。

- (1) 主イエスは誓いによって大祭司とされた。
 - ①それに対して、アロンの子たちは誓いなしに祭司となる。
 - ②血のつながりがあれば、自動的に祭司となる。
- (2) 再度、詩110:4が引用される。
 - ①「主は誓ってこう言われ、みこころを変えられることはない」
 - ②主イエスは、神ご自身の誓いによって永遠の大祭司として立てられた。
- (3) その結果、イエスは、さらにすぐれた契約の保証となられた。
 - ①「**保証**」とは、ビジネスの世界で言う「手付け金」のことである。
 - ②「さらにすぐれた契約」とは、新約のことである。
 - ③ここで初めて、新約という概念が登場する。
 - ④レビ的祭司職が代表してるディスペンセーションよりも、すぐれたディスペン セーションに入っている。
- 2. 23~24節

Heb 7:23 また、彼らの場合は、死ということがあるため、務めにいつまでもとどまることができず、大ぜいの者が祭司となりました。

Heb 7:24 しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを 持っておられます。

- (1) レビ的祭司たちは、期間限定の奉仕をした。
 - ①死という現実があった。
 - ②そのため、多くの者が祭司となった。
- (2) キリストの場合は、そうではない。
 - ①キリストは、永遠に存在される。
 - ②変わることのない祭司の務めを持っておられる。

3. 25 節

Heb 7:25 したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

- (1) 信仰を持ち続けるべき理由
 - ①キリストは、ご自分に信頼する人々を完全に救うことができる。
 - ②試練に打ち勝つ力が与えられる。
 - ③神との完全に調和のある関係がもたらされる。
- (2) キリストは、大祭司として常に私たちのためにとりなしをしておられる。
 - ①大祭司に近づくなら、信仰が守られる。
 - ②大祭司に近づくなら、キリストの律法を行なうことができる。

Ⅲ. 結論 (26~28節)

1. 26 節

Heb 7:26 また、このようにきよく、悪も汚れもなく、罪人から離れ、また、天よりも高くされた大祭司こそ、私たちにとってまさに必要な方です。

- (1) 以上の内容の適用
 - ①そのご性質は、罪も汚れもない。
 - ②復活後、父なる神の右の座に上げられた。
 - ③主イエスは、私たちに必要な大祭司である。

2. 27~28 節

Heb 7:27 ほかの大祭司たちとは違い、キリストには、まず自分の罪のために、その次に、民の罪のために毎日いけにえをささげる必要はありません。というのは、キリストは自分自身を

ささげ、ただ一度でこのことを成し遂げられたからです。

Heb 7:28 律法は弱さを持つ人間を大祭司に立てますが、律法のあとから来た誓いのみことばは、永遠に全うされた御子を立てるのです。

- (1) キリストは、他の大祭司とは違う。
 - ①自分の罪のために、また民の罪のために、毎日いけにえを捧げる必要はない。
 - ②キリストは、ただ一度で、これを成し遂げられた。 *より詳細な解説は、ヘブ9章と10章に出てくる。
- (2) 律法によって立てられたレビ的祭司職は、弱さを持った人間である。
 - ①しかし、キリストは神の誓いによって大祭司として立てられた。
 - ②御子は、永遠に完全な指導者(大祭司)とされている。
 - ③ヘブ2:10

Heb 2:10 神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであったのです。

結論:ヘブル書とロマ書の対比

- 1. ヘブ7:12~13とロマ6:14
 - (1) ヘブ7:12~13

Heb 7:12 祭司職が変われば、律法も必ず変わらなければなりませんが、

Heb 7:13 私たちが今まで論じて来たその方は、祭壇に仕える者を出したことのない別の部族 に属しておられるのです。

(2) ロマ6:14

Rom 6:14 というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。

- (3) 適用
 - ①ヘブル書は、祭司職が変われば、律法も必ず変わると教えている。
 - ②ロマ書は、信者は律法の下にはなく、恵みの下にあると教えている。
 - ③ともに、古い律法からの解放を教えている。 *主イエスを信じながら、モーセの律法の全部、あるいは一部が有効である かのように考えるのは、矛盾である。
 - ④もしモーセの律法が有効であるなら、私たちは罪の支配下にあることになる。*モーセの律法(レビ的祭司職)は、私たちを罪から解放することができなかった。

- ⑤大祭司イエスが、完全な救いをもたらしてくださった。
 - *大祭司が変わったので、律法も、モーセの律法からキリストの律法へ変わった。
 - *これは、律法の時代から恵みの時代への移行である。
 - *恵みの時代は、聖霊の時代である。
- 2. ヘブ7:24~25とロマ8:34
 - (1) ヘブ7:24~25

Heb 7:24 しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを持っておられます。

Heb 7:25 したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

(2) ロマ8:34

Rom 8:34 罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

(3) 適用

- ①キリスト・イエスは、死んでくださった。
- ②よみがえられた。
- ③神の右の座 (栄光の座) に着いている。
- ④私たちのために執りなしをしておられる。
 - *聖霊は私たちの心に中にあって、執りなしをしておられる。
 - *キリストは栄光の座で、執りなしをしておられる。
- ⑤以上のことは、ロマ6~8章のまとめである。

「さらにすぐれた契約」 ヘブル8:1~13

1. はじめに

- (1) この手紙が書かれた理由を再確認する。
 - ①信仰が後退しつつあった第2世代のメシアニック・ジューたちへの励まし
- (2) ユダヤ教の3つの柱は、天使、モーセ、レビ的祭司である。
 - ①御子は、天使に勝るお方であることが証明された。
 - ②御子は、モーセに勝るお方であることも証明された。
 - ③御子は、アロンに勝るお方であることの証明が続いている。
- (3) ヘブ8章の要点
 - ①レビ的祭司職は、シナイ契約に基づいていた。
 - ②イエスの祭司職は、新しい契約に基づいている。
 - ③シナイ契約は一時的なものであるが、新しい契約は永遠のものである。
 - ④それゆえ、イエスの祭司職は、レビ的祭司職に勝るものである。

2. アウトライン

- (1) すぐれた契約の仲介者イエス (1~6節)
- (2) 新しい契約の優位性 (7~12節)
- (3) 結論(13節)

結論:

- (1) 古い契約
- (2) 新しい契約

イエスの祭司職は、「さらにすぐれた契約」に基づいていることを学ぶ。

- Ⅰ. すぐれた契約の仲介者イエス(1~6節)
 - 1. 1~2節

Heb 8:1 以上述べたことの要点はこうです。すなわち、私たちの大祭司は天におられる大能者の御座の右に着座された方であり、

Heb 8:2 人間が設けたのではなくて、主が設けられた真実の幕屋である聖所で仕えておられる方です。

- (1)「以上述べたことの要点はこうです」
 - ①この言葉によって、議論が次の段階に移行することが分かる。
 - ②今まで論じてきた内容を要約し、新しいテーマに入る準備をしている。
- (2)「わたしたちにはこのような大祭司が与えられていて、」(新共同訳)
 - ① [We have such a high priest, who....] (ASV)
 - ②その内容は、4:16~7:28で論じられていた。
- (3) 大祭司イエスの特徴
 - ①イエスは、天におられる大能者の右の座に着座された。
 - ②詩 110:1 がそれを預言していた。

Psa 110:1 【主】は、私の主に仰せられる。/「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、/わたしの右の座に着いていよ。」

- *詩110の1節「私の主」と4節「メルキゼデクのような祭司」は同一人物。
- ③イエスの働きはすべて完了したので、それが可能になった。
 - *イエスが着座してるのは、ダビデの王座ではない。
 - *今イエスは、エルサレムからではなく、第三の天から支配しておられる。
- ④イエスが大祭司として仕えているのは、天の幕屋である。
 - *それは、人間が設けた地上の幕屋ではない。
 - *それは、主が設けられた幕屋である。
 - *それは、真実の(真の、本物の)幕屋である。
- ⑤天の幕屋での奉仕は、地上の幕屋での奉仕よりも優れている。 *次に、その証明がなされる。
- (4) ヘブ1:3の再確認

Heb 1:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。

2. 3~4節

Heb 8:3 すべて、大祭司は、ささげ物といけにえとをささげるために立てられます。したがって、この大祭司も何かささげる物を持っていなければなりません。

Heb 8:4 もしキリストが地上におられるのであったら、決して祭司とはなられないでしょう。 律法に従ってささげ物をする人たちがいるからです。

(1) 三段論法①

- ①大前提:大祭司の職務は、ささげ物といけにえをささげることである。
- ②小前提:イエスは大祭司である。
- ③結論:イエスは、何かささげる物を持っていなければならない。 *イエスのささげ物は、9:11~10:18で詳しく説明される。

(2) 三段論法②

- ①大前提:イエスが大祭司として仕える領域は、天上か地上である
- ②小前提:地上にはレビ的祭司がいるので、イエスが仕える領域は地上ではない。
- ③結論:イエスが仕える領域は、天上の幕屋でなければならない。 *天上の幕屋は、9:1~10で詳しく説明される。

3. 5 節

Heb 8:5 その人たちは、天にあるものの写しと影とに仕えているのであって、それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。神はこう言われたのです。「よく注意しなさい。山であなたに示された型に従って、すべてのものを作りなさい。」

- (1) レビ的祭司は、天にあるものの写しと影とに仕えているのである。
 - ①地上の幕屋は、天にあるものの型である。
 - ②地上の幕屋は、神からモーセに示された型に従って作られた。
 - ③レビ的祭司は、その幕屋で、モーセの律法に従って仕えた。 *この書簡の執筆時点で、神殿での祭儀は継続して行なわれていた。
- (2) 幕屋の建設を命じたモーセでさえ、その幕屋で祭司として奉仕ができなかった。 ①大祭司イエスも、モーセの律法によれば、地上の幕屋で仕える資格がない。 ②それゆえ、イエスの奉仕の場は、天の幕屋である。
- (3) 地上の幕屋は、一時的な契約 (シナイ契約) に基づいて建設された。
 - ①地上の幕屋は、永遠の幕屋に取って代わられる必要がある。
 - ②永遠の幕屋は、永遠の契約 (新しい契約) に基づかなければならない。

4. 6節

Heb 8:6 しかし今、キリストはさらにすぐれた務めを得られました。それは彼が、さらにすぐれた約束に基づいて制定された、さらにすぐれた契約の仲介者であるからです。

- (1) キリストの奉仕は、大祭司アロンよりも優れている。
 - ①大祭司キリストの奉仕は、すぐれた契約に基づいている。
 - ②キリストは、すぐれた契約の仲介者である。

- (2) シナイ契約の場合
 - ①モーセが仲介者となった。
 - ②アロンが大祭司となった。
- (3) 新しい契約の場合
 - ①イエスは、仲介者であり、大祭司である。
- (4) 新しい契約がすぐれている理由は、すぐれた約束に基づいているからである。
 - ①シナイ契約では、モーセの律法が与えられた。
 - *律法への従順は、祝福をもたらした。
 - *律法への不従順は、裁きを、時には死をもたらした。
 - ②新しい契約は、恵みによる契約である。
 - *新しい契約は、信じる者を義とすることができる。
 - *キリストの律法を実行するための力を与えることができる。
- (5) キリストの大祭司職は、新しい契約に基づいている。
 - ①次に、新しい契約の内容が論じられる。

Ⅱ. 新しい契約の優位性(7~12節)

1. 7節

Heb 8:7 もしあの初めの契約が欠けのないものであったなら、後のものが必要になる余地はなかったでしょう。

- (1) 初めの契約とは、シナイ契約である。
 - ①それには、欠点があった。
 - ②その契約は、一時的である。
 - ③その契約は、人を義とすることができない。
- (2) 後のものとは、新しい契約である。
 - ①神は、預言者たちを通して、新しい契約を結ぶと預言しておられた。
 - ②新しい契約の預言は、初めの契約が不完全であったことを証明している。
 - ③旧約聖書の時代から、新しい契約が来ることが知らされていた。
- 2. 8~9節

Heb 8:8 しかし、神は、それに欠けがあるとして、こう言われたのです。/「主が、言われる。 / 見よ。日が来る。 / わたしが、イスラエルの家やユダの家と / 新しい契約を結ぶ日が。

Heb 8:9 それは、わたしが彼らの父祖たちの手を引いて、/彼らをエジプトの地から導き出した日に/彼らと結んだ契約のようなものではない。/彼らがわたしの契約を守り通さないので、/わたしも、彼らを顧みなかったと、/主は言われる。

- (1) エレミヤ31:31~34の引用
 - ①エレミヤは、古い契約が廃棄される日が来ることを預言していた。
 - ②古い契約とは、出エジプトの時代にイスラエルの民と結んだ契約である。
 - ③古い契約の上に、レビ的祭司職が乗っていた。
 - ④古い契約が廃棄されたなら、レビ的祭司職も廃棄される。

(2) 8節aの訳文の比較

「しかし、神は、それに欠けがあるとして、こう言われたのです」(新改訳) 「事実、神はイスラエルの人々を非難して次のように言われています」(新共同訳) 「ところが、神は彼らを責めて言われた、」(口語訳)

「然るに彼らを咎めて言ひ給ふ」(文語訳)

- ①欠けがあったのは、モーセの律法ではなく、イスラエルの民である。
- ②イスラエルの民には、律法を行なう力がなかった。
- ③また、律法はその力を提供しなかった。

3. 10~12 節

Heb 8:10 それらの日の後、わたしが、/イスラエルの家と結ぶ契約は、これであると、/主が言われる。/わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、/彼らの心に書きつける。/わたしは彼らの神となり、/彼らはわたしの民となる。

Heb 8:11 また彼らが、おのおのその町の者に、/また、おのおのその兄弟に教えて、/『主を知れ』と言うことは決してない。/小さい者から大きい者に至るまで、/彼らはみな、わたしを知るようになるからである。

Heb 8:12 なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、/もはや、彼らの罪を思い出さないからである。」

- (1) 新しい契約は、神がイスラエルの家と結ぶ契約である。
 - ①エレミヤ書では、「イスラエルの家とユダの家」とある。
 - ②新しい契約は、神が教会と結んだものではない。
 - ③新しい契約は、アブラハム契約の祝福をイスラエルの民に提供するものである。
 - ④異邦人信者は、新しい契約に接ぎ木されたのである。

- (2) 新しい契約には、古い契約にない力がある。
 - ①罪の赦し
 - ②内面の変化(心に律法が記される)
 - ③神との新しい関係

Ⅲ. 結論 (13 節)

1. 13 節

Heb 8:13 神が新しい契約と言われたときには、初めのものを古いとされたのです。年を経て 古びたものは、すぐに消えて行きます。

- (1) エレミヤが新しい契約を預言した瞬間に、初めのものは古い契約となった。
 - ①古い契約は、一時的なものであることが明確になった。
 - ②古い契約は、すぐに消えて行く。
 - ③「古い」「古びる」
 - *「アーカイオス」: 時間的古さ
 - *「パレイオス」:機能的古さ
 - *ここでは、「パレイオオウ」(動詞)が使われている。
- (2) イエスが死んだ瞬間に、古い契約は消え去った。

結論:

- 1. 古い契約
 - (1) シナイ契約 (モーセ契約)
 - (2) 神とイスラエルの民の契約
 - ①仲介者は、モーセである。
 - (3) この契約の条項は、モーセの律法である。
 - ①モーセの律法自体には問題はない。
 - ②問題は、イスラエルの民にあった。
 - ③ロマ7:12~13

Rom 7:12 ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。

Rom 7:13 では、この良いものが、私に死をもたらしたのでしょうか。絶対にそんなことはありません。それはむしろ、罪なのです。罪は、この良いもので私に死をもたらすことによって、 罪として明らかにされ、戒めによって、極度に罪深いものとなりました。

- (4) 律法は、イスラエルの民をキリストに導く養育係になった(ガラ3:19~29)。
- (5) この契約の中心的要素は、血のいけにえである。

①レビ17:11

Lev 17:11 なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。

- (6) 神は、イスラエルの民が失敗することを知っておられた。
 - ①しかし、神は彼らを見捨てない。
 - ②その約束が、新しい契約である。

2. 新しい契約

- (1) 神とイスラエルの2つの家の契約
 - ①仲介者は、イエスである。
- (2) イスラエルの霊的回復が約束されている。
- (3) 古い契約ができなかったことを実現する契約である。
 - ①イスラエルの罪を取り去る。
 - ②聖霊が内住される。
 - ③メシアの律法を実行する力が与えられる。
- (4) 異邦人信者は、新しい契約に接ぎ木された。
- (5) 教会は、ユダヤ人信者と異邦人信者から成る「新しいひとりの人」である。
- (6) 新しい契約は、無条件契約であり、今も有効である。

「さらにすぐれた幕屋」 ヘブル9:1~10

1. はじめに

- (1) この手紙が書かれた理由を再確認する。
 - ①信仰が後退しつつあった第2世代のメシアニック・ジューたちへの励まし
- (2) ユダヤ教の3つの柱は、天使、モーセ、レビ的祭司である。
 - ①御子は、天使に勝るお方であることが証明された。
 - ②御子は、モーセに勝るお方であることも証明された。
 - ③御子は、アロンに勝るお方であることの証明が続いている。
- (3) ヘブ8:13と9:1はつながっている。

Heb 8:13 神が新しい契約と言われたときには、初めのものを古いとされたのです。年を経て 古びたものは、すぐに消えて行きます。

- ①初めの契約は、「古びた」ので、すぐに消えて行く。
 - *「アーカイオス」: 時間的古さ
 - *ここでは、「パレイオス」が用いられている:機能的古さ。
- ②著者は、初めの契約が「古びた」という意味を説明する。
 - *礼拝規定と礼拝のための幕屋
- ③この箇所の背景は、出25~31章、35~40章である。

2. アウトライン

- (1) 幕屋の備品 (1~5節)
- (2) 祭司の奉仕(6~7節)
- (3) 幕屋の限界性 (8~10節)

結論:

- (1) 地上の幕屋と天の幕屋の比較
- (2) ガラ3:23~26との対比

イエスは、「さらにすぐれた幕屋」で奉仕しておられることを学ぶ。

- I. 幕屋の備品(1~5節)
 - 1. 1節

Heb 9:1 初めの契約にも礼拝の規定と地上の聖所とがありました。

- (1) 著者は、レビ的祭司職よりも新しい契約に基づく祭司職の方がすぐれていることを証明しようとしている。
 - ①地上での礼拝の規定と地上の聖所は、本物ではなかった。
 - ②しかし、真理を教える方法としての意味はあった。
 - (2) 地上の幕屋についての復習が始まる。
 - ①詳細な説明ではなく、備品のリストアップである。

2. 2節

Heb 9:2 幕屋が設けられ、その前部の所には、燭台と机と供えのパンがありました。聖所と呼ばれる所です。

- (1) 幕屋の構造
 - ①外庭:青銅の柱と麻布で囲まれた空間。東側から中に入るようになっている。
 - ②内庭:いけにえを焼いて捧げる祭壇が置かれている辺りのことである。
 - ③聖所:「**前部の所**」とは、聖所のことである。4.5m×4.5m×9m。
 - ④至聖所: 聖所の奥にある空間。4.5m×4.5m×4.5m。
- (2) 聖所の備品
 - ①燭台(七枝の燭台)(メノラー)が向かって左に置かれていた。
 - ②机と供えのパンが向かって右に置かれていた。
 - *供えのパンは、12個置かれた。イスラエル12部族を象徴している。
 - *英語では、「shewbread」、「showbread」、「bread of the Presence」。
- 3. 3~5 節 a
- Heb 9:3 また、第二の垂れ幕のうしろには、至聖所と呼ばれる幕屋が設けられ、
- Heb 9:4 そこには金の香壇と、全面を金でおおわれた契約の箱があり、箱の中には、マナの入った金のつぼ、芽を出したアロンの杖、契約の二つの板がありました。
- Heb 9:5a また、箱の上には、贖罪蓋を翼でおおっている栄光のケルビムがありました。
 - (1)「第二の垂れ幕のうしろ」とは、至聖所のことである。
 - ①第一の垂れ幕は、内庭から聖所に入るときに通過する幕である。
 - (2) 至聖所の備品
 - ①金の香壇
 - *金の香壇は、第二の垂れ幕の前にあった(聖所にあった)。

- *ここでは至聖所にあったことになっている。この矛盾をどう解決するか。 *ギリシア語の「スミアステイリオン」には、「香壇」と「香炉」の2つの意味がある。
- *これは大祭司が至聖所の中に持って入る香炉のことであろう(レビ16:12)。
- ②全面を金で覆われた契約の箱
 - *マナの入った金の壷
 - *芽を出したアロンの杖
 - *十戒を書いた2枚の石版
- ③箱の上を天使ケルビムが翼を広げて覆っていた。*そこを、「贖罪蓋」とか「恵みの座」とか言う。
- (3) 至聖所には、大祭司だけが年に一度だけ入ることができた。 ①ここでの強調点は、「大祭司が年に一度だけ」というところである。
- 4. 5節b

Heb 9:5b しかしこれらについては、今いちいち述べることができません。

- (1) リストアップされた備品には、型としての意味があった。
 - ①しかし、著者はその意味について論じようとしていない。
 - ②彼の目的は、初めの契約に基づくレビ的祭司職と、新しい契約に基づく祭司職の対比である。
- (2) 幕屋そのものは、メシアの型である。
 - ①幕屋は、イスラエルの民に、どのようにして神に近づくべきかを教えた。
 - ②新しい契約の民である私たちは、キリストを通して神に近づく。
- (3) 型を論じる際の注意点
 - ①聖書に明確に書かれていないなら、安易に「型」だと言うべきではない。
 - ②細部にわたるまで型として説明するなら、それは主観的説明である。

Ⅱ. 祭司の奉仕(6~7節)

1. 6 節

Heb 9:6 さて、これらの物が以上のように整えられた上で、前の幕屋には、祭司たちがいつ も入って礼拝を行うのですが、

(1)「前の幕屋」とは、聖所のことである。

①祭司たちは、終わりのない奉仕を途切れることなく続けた。

(2) 奉仕の内容

①一日に2回、聖所に入って香をたく(出30:7~8)。

Exo 30:7 アロンはその上でかおりの高い香をたく。朝ごとにともしびを整えるときに、煙を立ち上らせなければならない。

Exo 30:8 アロンは夕暮れにも、ともしびをともすときに、煙を立ち上らせなければならない。 これは、あなたがたの代々にわたる、【主】の前の常供の香のささげ物である。

- ②一日に2回、ともしびを整える(出27:20~21)。
- ③週に1回、供えのパンを新しくする (レビ24:5~8)。

2. 7節

Heb 9:7 第二の幕屋には、大祭司だけが年に一度だけ入ります。そのとき、血を携えずに入るようなことはありません。その血は、自分のために、また、民が知らずに犯した罪のためにささげるものです。

- (1)「第二の幕屋」とは、至聖所のことである。
 - ①そこに入るのは、大祭司だけである。
 - ②全人類→イスラエルの民→レビ族→祭司(アロンの家系)→大祭司
 - *外庭が、全人類とイスラエルの民を分離した。
 - *内庭が、イスラエルの民とレビ族を分離した。
 - *聖所が、レビ族と祭司を分離した。
 - *至聖所が、祭司と大祭司を分離した。
 - ③大祭司は、年に一度だけそこに入る。 *それが、贖罪の日である(レビ16章)。
- (2) 大祭司は、血を携えて至聖所に入る。
 - ①血は、至聖所に入るためのチケットである。
 - ②大祭司は先ず自分の罪のために至聖所に入り、血を振りかける。
 - *「贖いの蓋」の東側
 - ③次に、再度至聖所に入り、民の罪のために血を振りかける。
 - *「贖いの蓋」の上と「贖いの蓋」の前
 - ④年に一度であるが、それでもこれを継続して行なう。
- (3) ここでの強調点は、神に近づくことが制限されていたという点である。
 - ①大祭司だけ

- ②年に一度だけ
- ③血の犠牲だけ

Ⅲ. 幕屋の限界性(8~10節)

1. 8節

Heb 9:8 これによって聖霊は次のことを示しておられます。すなわち、前の幕屋が存続しているかぎり、まことの聖所への道は、まだ明らかにされていないということです。

- (1) 聖霊が教える真理
 - ①聖霊は、レビ的祭儀体系の解釈者である。
 - ②地上の幕屋が存続している限り、まことの聖所への道は明らかにされていない。 *至聖所に入れるのは、大祭司が年に一度だけである。
- 2. 9~10節

Heb 9:9 この幕屋はその当時のための比喩です。それに従って、ささげ物といけにえとがさ さげられますが、それらは礼拝する者の良心を完全にすることはできません。

Heb 9:10 それらは、ただ食物と飲み物と種々の洗いに関するもので、新しい秩序の立てられる時まで課せられた、からだに関する規定にすぎないからです。

(1) 訳文の比較 (9節a)

「この幕屋はその当時のための比喩です」(新改訳)

「この幕屋とは、今という時の比喩です」(新共同訳)

「この幕屋というのは今の時代に対する比喩である」(口語訳)

「この幕屋はその時のために設けられたる比喩(たとへ)なり、」(文語訳)

- ①地上の幕屋は、今の時代に起こっていることを教える視聴覚教材である。
- (2) レビ的祭司職の弱点は明白である。
 - ①ささげ物といけにえによって、罪は一時的に覆われる。
 - ②しかし、罪責感は残る。
 - *「それらは礼拝する者の良心を完全にすることはできません」
- (3) レビ的祭司職は、一時的なものである。
 - ①「からだに関する規定」(新改訳)、「肉の規定」(新共同訳)(口語訳)
 - ②「新しい秩序の立てられる時まで課せられた」(新改訳)、「改革の時まで課せられている」(新共同訳)(口語訳)
 - ③天の幕屋が現れると、地上の幕屋は役割を終える。

結論:

- 1. 地上の幕屋と天の幕屋の比較
 - (1) 地上の幕屋は一時的である。
 - ①神に近づくための限定的な方法しか提供できない。
 - ②罪を一時的に覆うだけで、根本的な解決を与えることができない。
 - (2) 天の幕屋は、よりすぐれた幕屋である。
 - ①無制限に神に近づくことを可能にした。
 - ②罪の問題を完全に解決するための「いけにえ」が用意された。
 - (3) 幕屋の意味
 - ①ヘブル語で「ミシュカン」、英語で「tabernacle」。
 - ②「宿りの場」という意味。神が臨在される場。
 - ③クリスチャンは、天の幕屋へのフリーパスが与えられている。
- 2. ガラ3:23~26との対比
- Gal 3:23 信仰が現れる以前には、私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていましたが、それは、やがて示される信仰が得られるためでした。
- Gal 3:24 こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。
- Gal 3:25 しかし、信仰が現れた以上、私たちはもはや養育係の下にはいません。
- Gal 3:26 あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。
 - (1) 律法には、人を罪に閉じ込めるという役割があった。
 - (2) しかし、律法には「養育係」としての役割もあった。
 - ①「養育係」とは、ローマ時代の「家庭教師」のことで、知的に優れた奴隷が、 主人の子どもを養育した。
 - ②子どもが成人すると、養育係の役目は終了する。
 - ③それと同じように、今は律法の役割は終わった。
 - (3) キリストの福音を信じる信仰によって義とされた者は、霊的な成人になった。
 - (4) 律法に回帰することは、再び家庭教師の世話になろうとすることである。
 - (5) 信仰の成人とは、どのような人々のことなのか。
 - ①聖霊によるバプテスマを受けて、キリストにつく者とされた人々である。
 - ②キリストをその身に着た人である。
 - *子どもが成人になると、父親はその子に、大人になった印としてトーガと

いう上着を着せた。

*パウロは、トーガをイメージして、「キリストをその身に着た」と言った。

- (6) 旧約時代は、ユダヤ人とギリシア人(異邦人)の区別があった。
- (7) 新約時代になって、すべての人が同じ方法によって救われることになった。

「さらにすぐれたいけにえ」 ヘブル 9:11~28

1. はじめに

- (1) この手紙が書かれた理由を再確認する。
 - ①信仰が後退しつつあった第2世代のメシアニック・ジューたちへの励まし
- (2) ユダヤ教の3つの柱は、天使、モーセ、レビ的祭司である。
 - ①御子は、天使に勝るお方であることが証明された。
 - ②御子は、モーセに勝るお方であることも証明された。
 - ③御子は、アロンに勝るお方であることの証明が続いている。
- (3) これまでの文脈
 - ①地上の幕屋で行なわれた古い契約の祭儀は、限界を内包していた。
 - ②古い契約は、よりすぐれた新しい契約を予期していた。
 - ③新しい契約の仲介者であるキリストの奉仕は、さらにすぐれたものである。
 - ④今回は、キリストの犠牲がもたらしたものについて学ぶ。

2. アウトライン

- (1) 永遠の贖い(11~12節)
- (2) 聖め (13~14節)
- (3) 新しい契約 (15~22節)
- (4) 天の聖所での奉仕(23~28節)

結論:

- (1) 天の聖所の聖め
- (2) キリストの3つの現れ

新しい契約の仲介者であるキリストが何をもたらしたかを学ぶ。

- Ⅰ. 永遠の贖い (11~12節)
 - 1. 11~12節

Heb 9:11 しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事がらの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えれば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、

Heb 9:12 また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。

- (1) キリストは、すばらしい事がらの大祭司である。
 - ①すばらしい事がらとは、メシア預言の祝福である。*キリストを信じる者に約束された大いなる祝福のことである。
 - ②それはすでに成就している。
- (2) 奉仕の場の対比
 - ①レビ的祭司は、人間が造った幕屋で奉仕をする。 *地上の材料が使用されている。
 - *罪ある人間の手によって建てられた。
 - ②キリストは、天の幕屋で奉仕をする。 *神の臨在の場である。
- (3) いけにえの対比
 - ①レビ的祭司は、やぎと子牛との血を、罪の贖いとして毎年献げる。*動物の血は、罪を覆うだけで、罪の解決にはならない。*いわば、一年間の贖いである。
 - ②キリストは、ご自分の血によって罪の贖いを成し遂げた。 *それは、ただ一度限りのことである。「once for all」。 *それは、永遠の贖いである。
 - *過去の人にも、今生きている人にも、将来の人にも、適用される。
 - *信仰によって罪の赦しを受け取る人にのみ適用される。

Ⅱ. 聖め (13~14節)

1. 13~14節

Heb 9:13 もし、やぎと雄牛の血、また雌牛の灰を汚れた人々に注ぎかけると、それが聖めの働きをして肉体をきよいものにするとすれば、

Heb 9:14 まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者とすることでしょう。

(1) キリストの犠牲と律法の祭儀の対比(赤い雌牛の規定)

①民 19:17

Num 19:17 この汚れた者のためには、罪のきよめのために焼いた灰を取り、器に入れて、それ

に湧き水を加える。

- ②イスラエル人は、死体に触れると、7日間儀式的に汚れる。
- ③赤い雌牛を焼いた灰を清い水に混ぜ、それを汚れた人に3日目と7日目に注ぐ。
- ④それによって、その人は聖められる。
- ⑤灰は、「罪のためのいけにえ」の凝縮物とされた。
- ⑥これは、いつでも簡単に用いることができた。
- ⑦赤牛一頭の灰が、数百年間の必要をまかなった。
- ⑧ユダヤ人の歴史の中で、6頭が必要とされただけだと言われている。
- ⑨神殿の再建と赤の雌牛の必要性
- (2) もし、やぎと雄牛の血、赤牛の灰にそれほどの力があるとしたら、キリストの犠牲の力はいかばかりであろうか。
 - ①キリストの血は、罪のない完璧な「神の小羊」の血である。
 - ②キリストはご自身の血を、聖霊によって父なる神におささげになった。 *キリストの死の背後には、聖霊の関与があった。
 - ③その血は、私たちの良心をきよめる。
 - ④死んだ行いから私たちを離れさせる。*死んだ行いとは、自力で聖めを得ようとする空しい努力のことである。
 - ⑤私たちを生ける神に仕える者とする。

Ⅲ. 新しい契約(15~22節)

1. 15 節

Heb 9:15 こういうわけで、キリストは新しい契約の仲介者です。それは、初めの契約のときの違反を贖うための死が実現したので、召された者たちが永遠の資産の約束を受けることができるためなのです。

- (1) キリストは、新しい契約の仲介者となられた。
 - ①仲介者とは、敵対する当事者の間に立って、和解のために労する者である。
 - ②キリストは、父なる神と私たち罪人たちの間に立つ仲介者となってくださった。
- (2) キリストは、父なる神と私たちの間の障害(さまたげ)を取り除いてくださった。
 - ①キリストの死によって、モーセの律法の要求は満たされた。
 - ②それゆえ、召された者たち(信じる者たち)は、永遠の資産の約束を受け取ることができるようになった。
 - ③召された者たちとは、旧約時代の聖徒も新約聖書の聖徒も含む概念である。

2. 16~17 節

Heb 9:16 遺言には、遺言者の死亡証明が必要です。

Heb 9:17 遺言は、人が死んだとき初めて有効になるのであって、遺言者が生きている間は、 決して効力はありません。

- (1)「永遠の資産の約束を受ける」という言葉から、遺言の話が出てくる。
 - ①遺言の効力が発効するためには、遺言者の死が必要である。
 - ②遺言者の死を証明するのは、死亡証明である。

3. 18~21 節

Heb 9:18 したがって、初めの契約も血なしに成立したのではありません。

Heb 9:19 モーセは、律法に従ってすべての戒めを民全体に語って後、水と赤い色の羊の毛と ヒソプとのほかに、子牛とやぎの血を取って、契約の書自体にも民の全体にも注ぎかけ、

Heb 9:20 「これは神があなたがたに対して立てられた契約の血である」と言いました。

Heb 9:21 また彼は、幕屋と礼拝のすべての器具にも同様に血を注ぎかけました。

- (1) シナイ契約の発効も、契約の血を必要とした。
 - ①古代中近東では、契約は血を流すことによって締結された。
 - ②契約の血は、契約条項の履行を保証するものとなった。
- (2) 出24:1~11とヘブ9:15~18を総合的に要約すると、以下のようになる。
 - ①祭壇(神を象徴している)に血が注ぎかけられた。
 - ②契約の書に血が注ぎかけれらた。
 - ③民の全体に血が注ぎかけられた。
 - ④血は、契約の当事者を契約条項に結びつけた。
 - ⑤神は、民が契約を守るなら祝福すると約束された。
 - ⑥民は、契約違反に対して自らの命を差し出した。
 - *「これは神があなたがたに対して立てられた契約の血である」
- (3) 礼拝のための器具にも血が注ぎかけられた。
 - ①罪ある人間が触れる物は、すべて汚れるという教訓が語られている。

4. 22 節

Heb 9:22 それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいで しょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。

(1) 血を注ぎ出すことなしには、罪の赦しはない。

①これは、古い契約に関しても、新しい契約に関しても言える真理である。

②マタ 26:28

Mat 26:28 これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。

Ⅳ. 天の聖所での奉仕(23~28節)

1. 23~24節

Heb 9:23 ですから、天にあるものにかたどったものは、これらのものによってきよめられる 必要がありました。しかし天にあるもの自体は、これよりもさらにすぐれたいけにえで、きよめられなければなりません。

Heb 9:24 キリストは、本物の模型にすぎない、手で造った聖所に入られたのではなく、天そのものに入られたのです。そして、今、私たちのために神の御前に現れてくださるのです。

- (1) 地上の幕屋と天の幕屋の対比
 - ①地上の幕屋は、天の幕屋の型である。
 - ②地上の幕屋は、いけにえの血によってきよめられる必要があった。
 - ③地上の幕屋はコピーであるので、動物の犠牲で十分であった。
 - ④しかし、天にある幕屋のきよめのためには、さらにすぐれたいけにえが必要。

(2)「さらにすぐれたいけにえ」

- ① 「better sacrifices」(複数形)
- ②キリストの犠牲は、一度限りのものである。
- ③ここでの複数形は、「尊厳の複数形」と呼ばれるものである。
- ④キリストの犠牲は、古い契約に基づく数々のいけにえを終わらせた。
- (3) キリストが大祭司として奉仕しているのは、模型の幕屋でなく、本物の幕屋。
 - ①私たちのために、神の御前で執りなしをしておられる。
 - ②それなら、なぜ模型(ユダヤ教)に回帰する必要があるのか。

3. 25~26 節

Heb 9:25 それも、年ごとに自分の血でない血を携えて聖所に入る大祭司とは違って、キリストは、ご自分を幾度もささげることはなさいません。

Heb 9:26 もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。

- (1) キリストの犠牲は、ただ一度だけである。
 - ①苦難を繰り返す必要はない。
- (2) キリストは、世の終わりに来られた。 ①古い契約が、人間の罪性と無力さを完全に証明してから。
- (3) キリストは、罪を取り除くために来られた。 ①これは、永遠の贖いである。
- (4) キリストは、ご自身をいけにえとして献げるために来られた。 ①私が受けるべき罰を、その身に受けてくださった。
- 4. 27~28 節

Heb 9:27 そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、

Heb 9:28 キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度 目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

- (1) ここでは、関心が終末論に向かっている。
 - ①人間の運命は、一度死ぬことと、死後にさばきを受けるということ。
 - ②キリストは、この運命を変えてくださった。
- (2) キリストの来臨
 - ①一度目は、多くの人の罪を負うために。
 - ②二度目は、来臨を待ち望んでいる人々の救いのために。 *これは、携挙を指す言葉である。

結論:

- 1. 天の聖所の聖め
 - (1) なぜ天の聖所の聖めが必要なのか。 ①何かの理由で、天の聖所が汚された。
 - (2) サタンの反逆と関係がある。

①ヨブ15:15

Job 15:15 見よ。神はご自身の聖なる者たちをも信頼しない。/天も神の目にはきよくない。 ②イザ 14:12~14

Isa 14:12 暁の子、明けの明星よ。/どうしてあなたは天から落ちたのか。/国々を打ち破

った者よ。/どうしてあなたは地に切り倒されたのか。

Isa 14:13 あなたは心の中で言った。/『私は天に上ろう。/神の星々のはるか上に私の王座を上げ、/北の果てにある会合の山にすわろう。

Isa 14:14 密雲の頂に上り、/いと高き方のようになろう。』

③エゼキエル 28:11~19

Eze 28:18 あなたは不正な商いで不義を重ね、/あなたの聖所を汚した。/わたしはあなたのうちから火を出し、/あなたを焼き尽くした。/こうして、すべての者が見ている前で、/わたしはあなたを地上の灰とした。

- 2. キリストの3つの現れ (英語では、appear という言葉が3度出てくる)
 - (1) 26 節 (過去形の救いと関係している)

Heb 9:26 もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。

(2) 24節 (現在形の救いと関係している)

Heb 9:24 キリストは、本物の模型にすぎない、手で造った聖所に入られたのではなく、天そのものに入られたのです。そして、今、私たちのために神の御前に現れてくださるのです。

(3) 28節 (未来形の救いと関係している)

Heb 9:28 キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度 目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

「一度かぎりのキリストの犠牲」 ヘブル 10:1~18

1. はじめに

- (1) この手紙が書かれた理由を再確認する。
 - ①信仰が後退しつつあった第2世代のメシアニック・ジューたちへの励まし
- (2) ユダヤ教の3つの柱は、天使、モーセ、レビ的祭司である。
 - ①御子は、天使に勝るお方である(1:4~2:18)。
 - ②御子は、モーセに勝るお方である (3:1~6)。
 - ③御子は、アロンに勝るお方である(4:14~10:18)。
 - ④学んだことの適用(10:19~13:25)。

2. アウトライン

- (1) 旧約の犠牲(1~4節)
- (2) キリストの犠牲(5~10節)
- (3) キリストの現在の奉仕(11~14節)
- (4) 新約の恵み (15~18節)

結論:

- (1)「聖なるものとされている」(10節)
- (2)「その敵がご自分の足台となるのを待っておられる」(13節)

キリストの犠牲の素晴らしさを学ぶ。

- I. 旧約の犠牲(1~4節)
 - 1. 1節

Heb 10:1 律法には、後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はないのですから、 律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全に することができないのです。

- (1) モーセの律法は、後に来るすばらしいものの影である。
 - ①モーセの律法は、キリストとその御業を指し示す「予型」であった。
 - ②しかし、そこには実体はない。
- (2) モーセの律法に基づくいけにえの限界性

- ①神は、このいけにえでは満足されない。
 - *いけにえによって神に近づいてくる人々の罪を取り除くことができない。 *罪を一時的に覆うだけである。
- ②限界性の証拠
 - *年ごとに
 - *絶えず
 - *同じいけにえ
- ③「完全にすることができない」
 - *イスラエルの民は、良心が休まることはなかった。 *安心して神に近づくことができなかった。

2. 2~4節

Heb 10:2 もしそれができたのであったら、礼拝する人々は、一度きよめられた者として、もはや罪を意識しなかったはずであり、したがって、ささげ物をすることは、やんだはずです。 Heb 10:3 ところがかえって、これらのささげ物によって、罪が年ごとに思い出されるのです。 Heb 10:4 雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。

- (1) もし旧約のいけにえが有効なものであるなら、何が起こっていたか。
 - ①いけにえをささげた人々は、罪を意識しないようになったはずである。
 - ②その結果、ささげ物をすることは、やんだはずである。
 - (ILL) 薬を毎日服用している人は、病が完全に癒やされたとは言えない。
- (2) 実際は、それとは逆のことが起こった。
 - ①毎年の贖罪の日の儀式は、荘厳で麗しいものである。
 - ②しかし、その儀式は、罪は一時的に覆われただけで取り除かれたわけではないことを、イスラエルの民に教えた。
 - ③贖罪の日の儀式は、罪を思い出すための年中行事であった。
- (3)「雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません」
 - ①いけにえの血は、儀式的汚れを清めるためには有効であった。
 - ②しかし、罪を除くことはできなかった。

Ⅱ. キリストの犠牲(5~10節)

1. 5~7節

Heb 10:5 ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。/「あなたは、い

けにえやささげ物を望まないで、/わたしのために、からだを造ってくださいました。 Heb 10:6 あなたは全焼のいけにえと/罪のためのいけにえとで/満足されませんでした。 Heb 10:7 そこでわたしは言いました。/『さあ、わたしは来ました。/聖書のある巻に、/ わたしについてしるされているとおり、/神よ、あなたのみこころを行うために。』」

- (1) 神は何を不満に思われたのか。
 - ①いけにえを命じたのは神であるが、その目的は神の小羊であるメシアを指し示すことにあった。
 - *神が、いけにえの血や死体の山で喜ばれるはずがない。
 - ②民は、悔い改めの心がないままでいけにえを捧げ、神に喜ばれていると思った。 *彼らは、神が砕かれた心を求めておられることを理解しなかった。
- (2) 旧約のいけにえで満足されなかった神は、御子のためにからだを用意された。
 - ①これは、メシアの受肉を預言したものである。
 - ②著者は、キリストの犠牲の優位性を論じるために、詩 40:6~8 を引用する。 *これは、言わば、受肉に際してのキリストの独白である。
- (3) 詩40:6

Psa 40:6 あなたは、いけにえや穀物のささげ物を/お喜びにはなりませんでした。/あなたは私の耳を開いてくださいました。/あなたは、/全焼のいけにえも、罪のためのいけにえも、/お求めになりませんでした。

- ①「あなたは私の耳を開いてくださいました」(ヘブル語聖書)
- ②「わたしのために、からだを用意してくださいました」(七十人訳聖書)
- ③耳は体の一部である。それを体全体に見立てるのは、間違いではない。 *修辞法の提喩、「シネクドキ」である。
- ④ヘブル書の著者は、七十人訳聖書から引用している。
- (4) 詩 40:7~8

Psa 40:7 そのとき私は申しました。/「今、私はここに来ております。/巻き物の書に私のことが書いてあります。

Psa 40:8 わが神。私はみこころを行うことを喜びとします。/あなたのおしえは私の心のうちにあります。」

- ①神は、キリストが自発的に神に従うことを喜ばれた。 *動物のいけにえは、いやいや屠殺されていく。
- ②キリストの従順は、旧約聖書に書かれている。
- ③キリストは、旧約聖書のいけにえが果たせなかったことを成し遂げた。

2. 8~9節

Heb 10:8 すなわち、初めには、「あなたは、いけにえとささげ物、全焼のいけにえと罪のためのいけにえ(すなわち、律法に従ってささげられる、いろいろの物)を望まず、またそれらで満足されませんでした」と言い、

Heb 10:9 また、「さあ、わたしはあなたのみこころを行うために来ました」と言われたのです。後者が立てられるために、前者が廃止されるのです。

- (1) これは、ヘブル書の著者による詩40:6~8の解釈である。
 - ①神は、律法に基づくいけにえで満足されなかった。
 - ②それゆえ、メシアが神の御心を行うために来られた。
 - ③その結果、キリストの犠牲がささげられ、古いいけにえは廃止されるのである。
 - ④詩40篇は、旧約から新約への移行を預言していたのである。

3. 10 節

Heb 10:10 このみこころに従って、イエス・キリストのからだが、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。

- (1) キリストのからだが、ただ一度だけささげられたことにより、信じる者は聖なるものとされた。
 - ①これは、位置的真理である。

Ⅲ. キリストの現在の奉仕(11~14節)

1. 11~13 節

Heb 10:11 また、すべて祭司は毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえをくり返しささげますが、それらは決して罪を除き去ることができません。

Heb 10:12 しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の 座に着き、

Heb 10:13 それからは、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。

- (1) レビ的祭司の奉仕
 - ①毎日立って礼拝の務めを行う(毎日立つのは、仕事が完了していないから)。
 - ②同じいけにえを繰り返しささげる。
 - ③それらは、決して罪を除き去ることができない。
- (2) キリストの奉仕
 - ①罪のために永遠のいけにえをただ一度ささげた。

- ②神の右の座に着いた。
 - *栄誉と力と父の寵愛がある座である。
- ③敵がご自分の足台となるのを待っておられる。
 - *これは、詩110:1からの引用である。
- 2. 14節

Heb 10:14 キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。

- (1) キリストの犠牲によって何がもたらされたのか。
 - ①「聖なるものとされる人々」とは、この世から分かたれた人々である。
 - ②信仰によって救われた人々である。真の信者である。
 - ③「彼らの救いは、永遠に全うされた」
- (2)「彼らの救いは、永遠に全うされた」とは、どういう意味なのか。
 - ①神の前に安心して立てるようになった。 *キリストの義によって可能になった。
 - ②罪責感が処理され、完全な良心を持つようになった。 *神は、これ以上の犠牲を要求されない。

Ⅳ. 新約の恵み(15~18節)

1. 15~16 節

Heb 10:15 聖霊も私たちに次のように言って、あかしされます。

Heb 10:16 「それらの日の後、わたしが、/彼らと結ぼうとしている契約は、これであると、 /主は言われる。/わたしは、わたしの律法を彼らの心に置き、/彼らの思いに書きつける。」 /またこう言われます。

- (1) 新しい契約の預言は、エレ31:33 に預言されていた。
 - ①聖霊は、旧約聖書の中で、新しい契約を証ししておられた。
- 2. 17~18節

Heb 10:17 「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」 Heb 10:18 これらのことが赦されるところでは、罪のためのささげ物はもはや無用です。

- (1) 神は、信じる者の罪と不法を思い出すことはない。
 - ①これは、エレ31:34の預言である。

- (2) 今は新しい契約の時代になった。
 - ①それゆえ、古い契約のささげ物は無用である。
 - ②ユダヤ教に回帰しようとするのは、無意味なことである。
- (3)「罪のためのささげ物はもはや無用です」
 - ①これで、ヘブル書の教理的部分が終わる。
 - ②次回からは、適用に入る。

結論:

1. 「聖なるものとされている」(10節)

Heb 10:10 このみこころに従って、イエス・キリストのからだが、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。

- (1) これは、位置的真理である。
- (2) 成長したクリスチャンだけでなく、すべての信者に適用される。
- (3) キリストの犠牲によって勝ち取られた祝福である。
- (4) 信者は、キリストにあって義とされている。
- (5) 信者は、神により、神に対して、神のために、義とされている。
- (6) これは、パウロ書簡では、「義認」と称される。
- (7) 1コリ6:11

1Co 6:11 あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。

- (8) 聖霊が時間をかけて信者の内に行われる「聖化」とは、区別すべきである。
- 2. 「その敵がご自分の足台となるのを待っておられる」(13節)
 - (1) 詩110:1

Psa 110:1 【主】は、私の主に仰せられる。/「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、/わたしの右の座に着いていよ。」

(2) ピリ2:10~11

Php 2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、

Php 2:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたた えられるためです。

> (3) 信者は、義とされているだけでなく、キリストとともに支配するようになる。 ①このことは、再臨の時に起こる。

「勧告の言葉」

ヘブル10:19~25

1. はじめに

- (1) この手紙が書かれた理由を再確認する。
 - ①信仰が後退しつつあった第2世代のメシアニック・ジューたちへの励まし
- (2) ユダヤ教の3つの柱は、天使、モーセ、レビ的祭司である。
 - ①御子は、天使に勝るお方である(1:4~2:18)。
 - ②御子は、モーセに勝るお方である (3:1~6)。
 - ③御子は、アロンに勝るお方である(4:14~10:18)。
 - ④学んだことの適用(10:19~13:25)。

2. アウトライン

- (1) 万人祭司 (19~21節)
- (2) 神に近づく方法 (22節)
- (3) 勧告の言葉 (23~25節)

結論:

- (1) 万人祭司
- (2) 信仰と希望と愛

教理に基づいた勧告について学ぶ。

- I. 万人祭司(19~21節)
 - 1. 19 節

Heb 10:19 こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。

- (1)「こういうわけですから、兄弟たち」
 - ①今までの教理的議論を踏まえて、勧告の言葉が語られる。
 - ②読者は、新しい契約の祝福に与る信仰の「兄弟たち」である。
- (2) 旧約時代の状態
 - ①一般のユダヤ人たちは、聖所にも至聖所にも入れなかった。
 - ②祭司たちは聖所に入り、大祭司は至聖所に入った。

③仲介者としての祭司たちが存在していた。

(2) 新約時代の状態

- ①すべての信者が、まことの聖所に入ることができる。 *天の聖所で、神の臨在の前に出ることができる。
- ②これは、万人祭司の教えである。
- ③訳文の比較

「こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にま ことの聖所に入ることができるのです」(新改訳)

「それで、兄弟たち、わたしたちは、イエスの血によって聖所に入れると確信しています」(新共同訳)

「兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかることなく聖所にはいることができ、」(口語訳)

「ですから、愛する皆さん。 *今や*私たちは、血を流されたイエス様のおかげで、神様のおられる至聖所に、堂々と入って行けるのです」(リビングバイブル)

- ④私たちには、確信に基づく大胆さがある。
- ⑤大胆さの理由は、流されたイエスの血潮である。 *これは、よりすぐれたいけにえである。
- ⑥この手紙の読者たちは、「大胆さ」を必要としていた。

2. 20 節

Heb 10:20 イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける 道を設けてくださったのです。

- (1) イエスは、私たちのために、まことの聖所に至る道を設けてくださった。
 - ①新しい道である。新約によって用意された道である。
 - ②生ける道である。生ける救い主に至る道である。
- (2) ご自分の肉体を裂くことが、その方法であった。
 - ①聖所と至聖所を分けていた垂れ幕は、イエスの肉体の「型」であった。
 - ②私たちが至聖所に入るためには、垂れ幕が裂かれる必要があった。
 - ③つまり、イエスの肉体が裂かれる必要があったのである。
 - ④マタ 27:50~51

Mat 27:50 そのとき、イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた。

Mat 27:51 すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。

⑤神の臨在の前に出るたびに、支払われた犠牲の大きさを思い出すべきである。

3. 21 節

Heb 10:21 また、私たちには、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。

- (1) 私たちには、「大胆さ」だけでなく、イエスという大祭司も与えられている。
 - ①私たちは祭司であるが、それでも大祭司を必要としている。
 - ②大祭司の存在は、私たちが神から歓迎されていることを保証している。
 - ③「神の家」とは、普遍的教会である。
- (2) では、どのように神に近づけばよいのか。
 - ①これは、地上の有名人との会見ではない。
 - ②天地創造の神に謁見することが許されているのである。
 - ②人が神に近づく姿勢は、これが特権だとの認識の深さと相関関係にある。

Ⅱ. 神に近づく方法(22節)

1. 22 節

Heb 10:22 そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。

- (1) 真心をもって
 - ①イスラエル人たちは、口先だけで神に近づこうとした。
 - ②マタ 15:8~9

Mat 15:8 『この民は、口先ではわたしを敬うが、/その心は、わたしから遠く離れている。 Mat 15:9 彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。/人間の教えを、教えとして教え るだけだから。』」

- (2) 全き信仰もって
 - ①神の約束への全き信頼をもって、神に近づく。
 - ②イエスの血潮のゆえに、神は私を受け入れてくださると信じる。
- (3) きよめられた良心をもって
 - ①「心に血の注ぎをうけて」というのは、比喩的言葉である。 *イスラエルの民は、過越の小羊の血を鴨居と門柱に注ぎかけた。
 - ②これは、新生体験を指す言葉であろう。

- (4) きよい水で洗われたからだをもって
 - ①これもまた、比喩的言葉である。
 - ②「からだ」は、私たちの人生を指す。
 - ③「きよい水」

*みことば (エペ5:25~26)

*聖霊(ヨハ7:37~39)

*みことばを通して働かれる聖霊

④これは、継続的な聖化を指す言葉であろう。

Ⅲ. 勧告の言葉(23~25節)

1. 23~24 節

Heb 10:23 約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。

Heb 10:24 また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。

- (1) 希望を持ち続ける
 - ①「私たちの唯一の希望はキリストにある」との告白
 - ②どのようなことにも、動揺してはいけない。
 - *迫り来る迫害
 - *キリストにある将来の約束は、まだ目に見えていない。
 - *ユダヤ教のシステムは目に見えているので、回帰しやすい。
 - *それでも、一貫して「絶望」ではなく、「希望」を告白し続ける。
 - ③なぜなら、約束された方は真実な方である。
 - *イエスは、約束通りに戻って来られる。
 - *イエスに信頼する人は、失望させられることがない。
- (2) 愛と善行の実践
 - ①愛は根であり、善行は実である。
 - ②迫害の中でこそ、信者同士の励まし合いが必要である。
 - ③生き方を通して、他の人に積極的な影響を与えるように心がける。
- 2. 25 節

Heb 10:25 ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。

(1)「ある人々のように」

- ①この勧告は、いかなる時代の信徒にも適用できる真理である。
- ②第一義的には、ユダヤ教に回帰しようとしていたメシアニック・ジューへの勧告である。
- ③第2世代のメシアニック・ジューの中には、集会から離れた人たちがいた。 *彼らは、キリスト信仰からユダヤ教に回帰した人たちである。
- ④礼拝や交わりから足が遠のくのは、信仰の後退のしるしである。
 - *罪の問題
 - *不信仰の問題
 - *異端的信仰の問題
- ⑤孤立していては、豊かなクリスチャン生活を送ることはできない。

(2)「かの日が近づいているのを見て」

- ①クリスチャンは、励まし合って、集会に集うべきである。
- ②なぜなら、キリストの再臨の日が近づいているからである。
- ③その日には、迫害され、軽蔑されていた者たちが勝利者となる。
- ④その日が来るまで必要なのは、忍耐である。
- ⑤ロマ13:12

Rom 13:12 夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、 光の武具を着けようではありませんか。

⑥信仰の目を上げるなら、再臨が近いことが分かる。

結論:

1. 万人祭司

(1) 1ペテ2:9

1Pe 2:9 しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。

(2) 黙1:6

Rev 1:6 また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。

- (3) 宗教改革が生み出した3つの柱
 - ①聖書のみ
 - ②信仰義認

- ③万人祭司
- (4) ルターの論点
 - ①贖宥状の正当性を、カトリック教会内で神学的に論じようとした。
 - ②カトリック教会側は、それが都合が悪いので、論点をずらしてきた。
 - ③「あなたは、ローマ法王の権威に逆らうのか」
 - ④ルターは、「法王も教会も間違いを犯すことがある」と答えた。
 - ⑤また、すべての信者は祭司として、自ら聖書を解釈する権利があると主張した。
 - ⑥法王が絶対的な権威でないとしたら、どこにそれがあるのか。
 - (7)また、主観的な解釈を戒める基準は、どこにあるのか。
 - ⑧ルターは、「聖書に最終的な権威がある」とした。
- (5) 万人祭司の教理の実践は、厳密な聖書研究という土台と必要としている。
 - ①聖書は、神の自己啓示の書である。
 - ②その神は、特定の神(創造主、契約の神)である。
 - ③神は、私たちが啓示の書を理解することを期待しておられる。

2. 信仰と希望と愛

(1) 信仰

Heb 10:22 そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。

- ①信仰こそ、神と私たちをつなぐ土台である。
- ②罪は、神のことばを信用しなかったことから生まれた。
- ③救いは、神のことばを信用することによって与えられる。
- (2) 希望

Heb 10:23 約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。

- ①試練に打ち勝つ力は、希望である。
- ②この希望は、再臨に関する希望である。
- (3) 愛
- Heb 10:24 また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。
 - ①新約聖書では、愛とは感情ではなく、意志に基づく行動である。
 - ②私たちは、愛するように命じられている。
 - ③つまり、意志によって行動を起こすことは、私たちの使命である。

「意図的な罪に対する警告」 ヘブル 10:26~39

1. はじめに

- (1) この手紙が書かれた理由を再確認する。
 - ①信仰が後退しつつあった第2世代のメシアニック・ジューたちへの励まし
- (2) ユダヤ教の3つの柱は、天使、モーセ、レビ的祭司である。
 - ①御子は、天使に勝るお方である(1:4~2:18)。
 - ②御子は、モーセに勝るお方である (3:1~6)。
 - ③御子は、アロンに勝るお方である(4:14~10:18)。
 - ④学んだことの適用(10:19~13:25)。
- (3) 前回は、10:25で終わった。今回は、その続きである。

Heb 10:25 ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。

- ①すでに背教は、ある人々の間で起こっている。 *背教とは、ユダヤ教への回帰である。
- ②この手紙の読者は、まだ背教はしていないが、その可能性を考えている。 *それゆえ、警告と励ましが必要なのである。
- (4) この箇所は、信者は救いを失う可能性があるという教えの根拠のひとつである。 ①厳密に釈義をすると、その教えは非聖書的であることが分かる。

2. アウトライン

- (1) 警告 (26~31節)
- (2) 励まし(32~39節)

結論:

- (1) 背教者が犯す3つの罪
- (2) 試練に打ち勝つ3つの秘訣

意図的な罪に対する警告の内容について学ぶ。

I. 警告 (26~31節)

1. 26~27 節

Heb 10:26 もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪の ためのいけにえは、もはや残されていません。

Heb 10:27 ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つより ほかはないのです。

- (1) この手紙の読者の現状
 - ①彼らは、ユダヤ教への回帰を考えている。
 - ②しかし彼らは、この手紙をここまで読んで、「真理の知識を受けた」。
 - *「眞理を知る知識」(文語訳)
- (2) この手紙の読者の将来の可能性
 - ①彼らは、「ことさらに罪を犯し続ける」可能性がある。
 - *「故意に罪を犯し続ける」(新共同訳)
 - * For if we go on sinning willfully | (NASB)
 - ②この罪は、意図的に犯す罪である。
 - ③この罪は、継続して犯す罪である。
 - ④この罪は、無知や弱さのために単発的に犯す罪ではない(1ヨハ1:9参照)。
 - ⑤この罪は、文脈上は、ユダヤ教に回帰し、そこに留まるという罪である。
- (3) この罪がもたらす結果
 - ①「罪のためのいけにえは、もはや残されていません」
 - ②主イエスを拒否したなら、もはや罪のためのいけにえは残されていない。 *主イエスは、私たちのための最終的ないけにえである。 *ユダヤ教に戻るのは、主イエスを拒否することである。
 - ③この罪がもたらす結果は、死である。
 - ④この死は、霊的な死ではない。*主イエスを信じたとき、すべての罪は永遠に赦された。
 - ⑤この死は、肉体的な死である。 *意図的で継続的な罪に対しては、肉体的死という裁きが下る。
- (4)「さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火」
 - ①これは、紀元70年のエルサレム崩壊のことである。
 - ②背教者たちは、この裁きを恐れながら待つしかない。

2. 28~29節

Heb 10:28 だれでもモーセの律法を無視する者は、二、三の証人のことばに基づいて、あわれみを受けることなく死刑に処せられます。

Heb 10:29 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと みなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい。

- (1) モーセの律法に違反した者
 - ①2人または3人の証人の証言により、死刑に処せられた。
 - ②姦淫の罪、殺人の罪、冒涜の罪には、いけにえが用意されていなかった。 *申17:2~6
 - ③故意に罪を犯す者は、【主】を冒涜する者である。

*民15:29~31

- (2) 真理の知識を受けた後に犯す罪の裁きは、なおさら厳しいものとなる。
 - ①それは、三位一体の神の御業を否定する罪である。
 - ②モーセよりも偉大なお方を拒否するなら、より厳しい裁きを受ける。

3. 30~31 節

Heb 10:30 私たちは、「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする」、また、「主が その民をさばかれる」と言われる方を知っています。

Heb 10:31 生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。

- (1)「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする」
 - ①申32:35からの引用
 - ②「復讐する」とは、正義の実現である。
 - ③罪人は、その罪に見合った報いを受ける。
- (2)「主がその民をさばかれる」
 - ①申32:36からの引用
 - ②背教者たちは神の民なので、神は彼らを裁かれる。
 - ③この裁きは、肉体の死である。
- (3) 生ける神は、ご自身の民の霊的状態をご存じである。
 - ①その神を恐れることは、知恵の始まりである。

Ⅱ. 励まし(32~39節)

1. 32~33 節

Heb 10:32 あなたがたは、光に照らされて後、苦難に会いながら激しい戦いに耐えた初めの ころを、思い起こしなさい。

Heb 10:33 人々の目の前で、そしりと苦しみとを受けた者もあれば、このようなめにあった 人々の仲間になった者もありました。

- (1) 彼らは、キリストを信じてから種々の迫害に会った。
 - ①ユダヤ人からの迫害、家族からの勘当、友人との断絶
 - ②しかし、迫害の中でも、喜びを覚えることがあった。

Act 5:41 そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。

- (2) ひとりで苦しむことがあった。
 - ①人々の目の前で辱めを受けた。
- (3) 信者仲間とともに苦しむこともあった。

2. 34 節

Heb 10:34 あなたがたは、捕らえられている人々を思いやり、また、もっとすぐれた、いつまでも残る財産を持っていることを知っていたので、自分の財産が奪われても、喜んで忍びました。

- (1) 彼らは、キリストのゆえに囚人となっている人たちを訪問した。
 - ①自分も逮捕される可能性があることを恐れなかった。
- (2) 支配者から財産を没収されても、喜んで忍んだ。
 - ①彼らは、富を神とするよりは、キリストに忠実であることを選んだ。
 - ②彼らは、自分たちが永遠の財産を持っていることを知っていた。

IPe 1:4 また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。

3. 35~36 節

Heb 10:35 ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはなりません。それは大きな報いをも たらすものなのです。

Heb 10:36 あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは 忍耐です。

- (1) 神の報いが与えられる時は近い。
 - ①今までの労苦の実を刈り取る時が近い。
 - ②それゆえ、今あきらめてはならない。
- (2) 彼らに必要なものは、忍耐である。
 - ①ユダヤ教に回帰することではなく、キリストに留まることである。
 - ②神の御心を行なう者は、約束のものを手に入れるようになる。

4. 37 節

Heb 10:37 「もうしばらくすれば、/来るべき方が来られる。おそくなることはない。

(1) 約束のものは、キリストの再臨の時に与えられる。

①ハバ2:3

Hab 2:3 この幻は、定めの時について証言しており、/終わりについて告げ、/まやかしを言ってはいない。/もしおそくなっても、それを待て。/それは必ず来る。遅れることはない。

5. 38~39 節

Heb 10:38 わたしの義人は信仰によって生きる。/もし、恐れ退くなら、/わたしのこころは彼を喜ばない。|

Heb 10:39 私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。

(1) 義人は、見えるところによってではなく、信仰によって生きる。

①ハバ2:4

Hab 2:4 見よ。彼の心はうぬぼれていて、まっすぐでない。/しかし、正しい人はその信仰によって生きる。

- (2) 信者は、迫害を恐れるのではなく、神に喜ばれないことを恐れるべきである。
 - ①これは、神の約束に価値を置き、見えないものを見ながら生きる人生である。
 - ②そのように生きた人たちの例が、11章で取り上げられる。

結論:

1. 背教者が犯す3つの罪

Heb 10:29 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと みなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい。

- (1) その人は、神の御子を踏みつけた。
 - ①この人は、信じたように振る舞いながら、実際は救われていない人ではない。

- ②信仰によって救われながら、キリストから離れていく人である。 (ILL) 踏み絵のキリスト像は、その顔が次第にぼやけてくる。
- (2) 自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなした。
 - ①新約のしるしであるキリストの血を冒涜した。
 - ②「汚れたもの」とは、「unholy thing」であり、「俗なるもの」である。
- (3) 恵みの聖霊を侮った。
 - ①聖霊は、福音を理解する力を与える。
 - ②聖霊は、罪の自覚を与える。
 - ③聖霊は、救い主イエスを指し示す。
 - ④背教の道を選ぶことは、聖霊を侮ることである。
- 2. 試練に打ち勝つ3つの秘訣
 - (1) 過去の経験を思い起こす。
 - ①信仰に導かれた経緯
 - ②信じた時の喜び
 - ③経験してきた数々の試練
 - ④試練の中で見出した神の恵み
 - (2) 報いは近いことを思い起こす。
 - ①忍耐こそ、ヘブル書のテーマである。
 - ②神が約束されたことは、すべて成就する。
 - ③その成就の時は、近い。
 - ④今は、不信仰に陥る時ではない。
 - (3) 神が喜ばれないことを恐れる。
 - ①神が喜ばれない道を選ぶなら、神の守りの外に出ることになる。
 - ②それは、危険なことである。
 - ③霊的覆いの中に自分を置く方法
 - *信者の交わりに参加すること
 - *正しく聖書を解き明かす指導者から学ぶこと
 - *約束された方は真実であることを信じ、その方に従うこと